

川の柳の雑の誌

麻生路郎★主宰



雜誌奉還

No. 239

終刊號

Pensoj flugas trans la land-limon

戦線への慰問に

麻生路郎著

新川柳評釋

定價〇・八〇
千・〇・八〇

本館の川柳で一物置りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

戸倉普天著・麻生路郎序

普天隨筆

(非賣品)

川柳人の隨筆の面白さは又別である。この場合の面白さは滑稽といふ意味ではない。辛辣に近い觀察の鋭さの謂である。著者は日東新産業の専務。(實費三圓送料二十五錢で頒つ)

戸田孤篔著・麻生路郎序

柳川二千六百年史

定價〇・九〇
千・〇・八〇

著者一人の創作、詠史川柳の主題をめぐ、
街の難音(賣切)大空(賣切)人の一代(賣切)
累卵の遊び(賣切) 詩人雨眼(賣切)

合一本

「川柳雜誌」の合本御希望の方は大至急御注文下さい。「川柳雜誌」菊版時代の合本では五卷、六卷、八卷、九卷、十卷があり、また(定價各五圓、送料三〇錢)なほ、一都宛のバラの舊號もあり、本館お調への上、往復ハガキでお問ひ合せ願ひます。型は菊判・菊倍判・四六倍判の三種何れも、定價一部三〇錢送料一錢

所行發

大阪市住吉區万代西五ノ二五

不朽洞

振替大阪三〇三九二番

一御入院は

需にめ應一

谷内小兒科病院

醫學博士 谷内與一郎

大阪市港區市岡元町一丁目(電車道)

電話西四四八七一
八〇三七番

濕布に

スホエキ粉末

品妹姉スホエキ

有効長時間・爽快・簡便

特徴

- 一、長時間有効なる事
- 一、使用法簡便にして非常に爽快なる事
- 一、皮膚炎を起す等の副作用なし
- 一、價格も低廉なり

主治効能

感冒、肺炎、肋膜炎、氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎、ロイマチス、神經痛、打撲痛、捻挫等

包裝 100瓦 250瓦 500瓦 3包

今般スホエキ姉妹品として發賣したる本劑は専らその藥効並に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便安全なる粉末濕布藥なり

C-PE26



戦局は一寸刻みに緊迫して行く。雑誌なんかには下つてゐる時ではない。文化は第二陣だ。雑誌なんかは潔く投げ出して直ちに戦鬪配置につくべきである。それこそ我々に課せられた重大使命であると観ずる。ここに本誌は自發的に巻を閉ぢることとした。

終刊の辭

みたみわれ
大君にすべてを捧げまつらん

川柳雑誌・十二月號目次

| | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 表紙(蒙古の少女)……………岩崎 柳路撮影 | 終刊の辭……………(一) |
| 苦闘四十年……………麻生 路郎……………(二) | 北支征破回顧断片……………加川 泉泡……………(三) |
| 武玉川研究(三七)……………梅本 塵山……………(四) | ……………森 子……………(五) |
| 陣中川柳……………北 羊……………(六) | 紫・煙・談・語……………路郎生……………(七) |
| 泰にゐて想ふ……………大森風來子……………(八) | 初等川柳講座(二五)……………麻生 路郎……………(九) |
| 凡人 經……………森 東魚……………(一〇) | 評作品二三……………路郎・葎乃……………(一一) |
| ……………豆秋・孤篷……………(一二) | 飛燕往來……………(一三) |
| 川柳の大和篇(二〇)……………麻生 路郎……………(一四) | 決戦下の師走川柳大會……………統人 記……………(一五) |
| 近作 柳 輝……………麻生路郎選……………(一六) | ……………前田 五健……………(一七) |
| ……………安川久留美……………(一八) | 句……………須崎豆秋選……………(一九) |
| ……………丸尾潮花選……………(二〇) | 一趣 味……………(二一) |
| 集路 閑地……………(二二) | 各地 柳壇……………(二三) |
| 川協・柳界展望……………(二四) | 廻轉 椅子……………(二五) |
| 社關係の人々……………(二六) | |



苦闘四十年

麻生路郎

私が川柳に手を染めてからも四十年になる。タツタ四十年と云ふ考へ方も出来ないこともないが考へやうによつては四十年は決して短いと云へない。四十年の歲月を一瞬の間のやうに考へるのは、春の山路をテタ／＼と歩いて来た旅人がフト背後を振り向くと、つひ今の先一汗滴して越して来た山々にはもう霞がかゝつて何んにも見へないのとよく似てあると思ふ。急坂をよぎ登つた苦しきなどはスツカリ忘れてしまふからである。

田山花袋が、「田舎教師」といふ小説の書き出しに、四里の道は長かつたと書いてあるやうに、僅に四里の道すら考へやうによつては長いのである。まして四十年の歲月は私にとつて決して短かくはなかつた。よくも一つ事を飽きもせずにつけて来たものだと我ながらあきれもし感心もする。

小集や句會などで、時々川柳

を始めた頃の事を訊かれるがそんな時に隅の方で「私はまだ生れてゐない頃のことですネ」と云ふ聲がする。なるほど見渡すと生れてゐない人の方が多いやうだ。そう考へると、四十年は一つの歴史でもある。

生れてゐないと云へば、はる／＼遠征してゐられる幾百萬の兵隊さんも、増産に奮闘してゐられる幾百萬の工員さんも、幾百萬の赤ん坊や學童たちも、誰ひとり生れてゐなかつたのである。そう考へて見ると四十年はおそろしく長い時間だと云へやう。世の中にして大した變り方である。飛行機などが飛ぶやうになつたのは、それからズツと後の話である。

餅を搗くと云ふことは至極簡單なことのやうに思へるが、普天氏の隨筆「丹波の餅を語る」といふ一文は餅のことについて四十何ん頁を費してゐられる。しかもまだ、補遺でも書かねば書き洩らしたことがあるといふ

話である。そんな調子で私の川柳の四十年を書かうものなら、何ん千ページ、何ん萬ページ書いてもとゞまるところを知らないであらう。

しかし、私は今こゝで、そんなことをだら／＼と山鳥の尾のしだり尾式に書き綴らうと云ふのではない。たとへ書きたくても、そんなスペースもなければそんな時間も持ち合はさなからである。ただ四十年を回顧して、そのうちからほんの少しの話題を書きこさうとするのに過ぎないのである。

私は明治三十七年の春、そのころ出入橋にあつた高商豫科(商大の前身)に入學した。そして入學と同時にクラスで讀賣新聞をとつたが、それに讀賣柳壇と稱する欄があつた。これに吸ひつけられて投句をはじめたのが、私が川柳をやるやうになつた初めである。

選者は故田能村朴念仁氏であつた。朴念仁氏が選をやめてから、讀賣新聞に勤務してゐた故窪田而笑子氏が代つて選をはじめたので當時うまい作家がみんな投句をやめてしまつた。而笑子も投句家の一人だつたので、而笑子の選にあつたらなかつたのである。私もやめた一人である。尤もその後柳友として相識るやうになつて、時々すゝめられるまゝに出句したこともあつたが投句家のうちにはゐなかつた。當時東京柳壇は劍花坊一派久

良岐一派と朴念仁の讀賣派の三派鼎立といふ形であつた。後、而笑子が朴念仁に代つて而笑子一派が出来たが三派の中では而笑子派が一番弱體であつた。話は前に戻るがその年の末に、堂島の濱通りで、米穀取引所の向ひに、故吉弘白眼が社長で「大阪日報」が生れ、これに「浪花樽」と云ふ柳壇が出来た。選者の名は掲げてゐなかつたが故吉田笠雨であつたさうだ。この「浪花樽」へ盛んに投句をしてゐた投句家同志がお互ひに會合をやるやうになり、小島六厘坊一派とも知るやうになつてこれに合流して大阪の柳界と云つたやうなものが出来た。

そして自ら天才六厘坊と稱した小島六厘坊が大阪柳壇を牛耳つた。六厘坊が錢に關する雅號の持主なので六厘坊一派の多くは七厘坊、八厘坊、半文錢、當百と云つたやうに錢に關する雅號が多かつた。

その頃の柳誌「葉柳」は六厘坊の主宰するところであつたが、明治四十二年四月に刊行した櫻花號を最後として消えてしまつた。それは六厘坊が二十二才で夭折したので六厘坊亡きあとをおさへて行く人材がなかつたからである。つまり雑誌を六厘坊に殉じさせた譯であつた。當時の私の雅號は天涯であつた。尤もその外にいろんな雅號を用ひて

ゐたが今一々記憶してゐない私にとつて、その當時は苦闘と云ふよりも、むしろ樂闘のころであつた。と云ふのは一般に句の目標が柳樽の句を凌ぐといふ傾向にあつたので、創作上の悩みはそれほど深刻なものになつたからである。ところが明治四十二年、即ち六厘坊が亡くなる少し以前から従来の作風に嫌らず、作風に新しい傾向が生じた私もその一人であつた。同志と共に「轍」を出したが、私は當時上京したので、東京の「矢車」に據つた。「矢車」が廢刊となつて發表機關を失つたが素志を譲へすことが出来なため、遂に大正四年八月一日に私は、日車氏と共に「雪」を刊行して新しい傾向の句にひたむきに押進んだそれがため新傾向と呼ばれて既成派からは嫌厭せられた。

しかしこの當時各派ともに(各派と云つても、思想的にさう隔絶してゐないものまで)盛んに分裂して、鎬ぎをけつた。そしてお互ひの心のうちには、自派の作品に對して自負心の強い割に、反響の少ないのに苦慮してゐたのは事實である。「雪」は柳界よりも寧ろ文壇人に認められてゐた。漱石が讀んでゐたといふことなども私たち同人をうれしがらせた。井泉水氏あたりも「雪」に刺戟されて俳

句の革新へ走つたのだと云ふやうな話も聞いた。が「雪」は大正六年の二月號きりて廢刊した。それは文藝的日刊新聞を計畫するために廢したのであつたが、日刊新聞は遂に出なかつた。その後大正七年七月に「土圍子」を出したが、これは四號でやめた。續いて「後の葉柳」を出した。同人は日車、半文鏡と私の三人だけであつたがこれは三號で廢めた。廢める理由は、小島紺之介君が出した「楊柳」に應援をたのまれたので「後の葉柳」を犠牲にして句を「楊柳」に發表したのであつた。

その後、日車氏は半文鏡氏と共に「小康」を出したが、私は日車の強請を斷じてしりぞけ、これには參加しなかつた。これについては面白い事件があつたが、餘談であるから他日の機會に譲ることとする。

私は靜に考へた。柳界は麻の如く亂れて全く收拾するところを知らない。何人も川柳を愛してゐるには違ひないが何れも自派獨尊であり、兄弟艦にせめぐの類である。これではいけない。お五川柳家同志がいかに、可なりとして褒めちぎつたところで、一步社會へ出て見れば、まるで社會から川柳の存在が認められてゐないではないか。これ

はいけない。こゝに眼をつけたい私は日車氏等の強請懇望これつとめてくれた友情をも振り切つて、社會的な柳誌、社會を對照とする柳誌刊行の計畫をすすめたのであつた。

これは私にとつても、全柳界にとつても一大異變であつた。舊同志は私が墮落したかの如く歎じて悲しんだ。金澤へ出掛けて私の意見を發表した時など、翌日同志が私の宿へ押しかけて来て「アレは本氣で云つたのですか」と眼の色を變へて談話談判を食つたものである。

私は當時の柳誌が、豆本式の範圍を出ないこと、兎糞的刊行であること、お五川問での寄贈本位であること、内輪同志で摩擦ばかりしてゐること、これでは社會に認められる筈がないことなどを列擧して、私としては俳誌「ホトトギス」を旨指して經營をやつてゆくつもりだ。「ホトトギス」が内容的にどんな地位に置かれてゐるか云ふことは別として、この誌の社會的存在價値は見逃すことが出来ないと思つたからである。そこで新しく出す雑誌は柳界を代表させる意味と、寸時も早く社會に知らせる便宜上、普遍的な「川柳雜誌」といふ名を選んだのであることをつけ加へた。そして初心者指導、

古句研究の發表並びに川柳の社會化運動の機關誌として刊行することにしたのである。従つて先づ經濟的確立、月刊斷行、量的發展、それから質的完成への方針を定め、大正十三年二月十五日「川柳雜誌」の第一巻第一號を世に送つたのである。勿論その反響の大きかつたことは云ふまでもなかつた。久良伎氏は「川柳雜誌」と云ふ名は僭越だと云つて來たが相手にしなかつた。しかし「川柳雜誌」が出てから川柳の雜誌を川柳雜誌と云へば混同の懼れがあるの

でないことが知れるであらう「きやり」の豆本、「番傘」の四六横綴などをはじめ、全國の柳誌と云ふ柳誌が、「川柳雜誌」にならつて遂に柳誌菊版時代を出現するやうになつた。我社では從來の寄贈本位を改めて定價賣を斷行したそれには面白い話がある。

私が東京へ出かけて、内幸町の旅館に泊つてゐる際、宮尾しげを、川上三太郎の兩君が訪ねて來たので、三太郎から一ヶ年分の購讀料をまき上げた。しかしだまき上げた譯ではなかつた。一ヶ年分は社の會計へ繰入れたが、三太郎君にはビールを半ダース吞ませることにした。ビール代は勿論私のポケットマネーであり、その金は私の勤勞によつて生れたものであつた。川柳雜誌社へ多年つき込みこそすれ社からビター一文の収入もないことは云ふまでもなからう。私は私の理論を徹底させるために、運動費持ちで、驅けづり廻つたものである。路郎はオレから購讀料をとつた。誌代(柳誌)を拂はされたのは生れてはじめてと三太郎はよくこのことを誰彼に話してゐた。當り前ではないか。私が着服する誌代ではないし、川柳を愛すればこそ誌代の請求をするのだ。呉れてやることはイトやすいことであるが、それでは購讀者が殖えれば殖えるほど、社は廢刊に近づくことになるのだ。それでは發展は遂にのぞまれない。發展どころか

連中もあつたが、第一期の川柳社會化運動も、十年目に、東京で社の句會を開いて社會化完遂の聲明をした。この時には大阪から多數の同人を引き連れて上京、東京で空前だと云はれた各派網羅の大會を開催した。

第二期は量的發展並びに質的完成を目指したのであつたが、これ又、最早何人が繼承しても繼續し得るだけの社礎をきづき得たので、後繼者を物色中たま／＼大東亞戰爭勃發、戦局の緊迫に鑑み本年末をもつて、雜誌奉還の舉に出ることになつたのである。第三期は私を自由な立場に於て川柳の研究に没頭さして貰ひたいと云ふのであつたが、雜誌を放れることの自由はこゝに得られたが、國難に背を向けての自由さはない筈であるから、私自身の研究が、これからの十年間にどの程度の進展を見せるかは疑問である。しかし私は大東亞に闘ふ皇國日本の一員としての働き以外寸暇があれば必ず川柳の研究に没頭し、川柳による報國的活動に突撃することを誓ふものである。

話を再び前に戻すが、東京句會以前のことである。川柳の社會化運動を徹底せしめるために「川柳雜誌」の百號記念の大會を朝日會館で開催し

た。この催は俳人月斗を一驚させ、物に動じない朝日新聞の計畫部の人さへも唸らせたのであつた。未だ曾て短詩型文學で朝日會館の席を埋めたことがないからである。しかも講演と講演との間に音楽すら入れず、三人ぶつづけに講演をやつたことも會館はじまつて以來のレコード破りだと云はれた。しかも入場料一圓

○ 松山 前田 五 健

十二月 八日 風神と吹く
御慶事の鯛、海老、樽と灯サンラン
日本の母平凡によく動き
無敵さは氣輕に鉦かけ直し
聖戰のいろはこのいろ白い菊
埋火に似た友達のあたゝかみ
勝報へ器械の調子よい調子
一階級上らふかなど出陣す
嫁く夜に女同志で頼む事

○ 金澤 安川 久留美

からたちの冬のやうにも見透かされ
柵の垣根つゞきは高利貸

で千人以上の人々を蒐めたのである。この時にも面白いエピソードがある。第一は社會事業としての興業税を支拂つたことであり、第二は入場料を一圓・五十錢の二種類にして欲しいと云ふ一部同人の聲を蹴飛ばして一圓で押切つたことであつた。第三は餘興に拙吟
戀の良あの眼だらうか眼だ

の大會のために前後三十日間一滴の酒も口にしなかつたことも特筆大書すべきものであつたのである。

この大會以外、朝日新聞社社會事業團後援の下に、同社三階大廣間で、歴年同情週間募金のための師走川柳大會を舉行、常に三百餘名の川柳人を蒐めて川柳界のために太い氣を吐いたものであつた。

其他三越八階に於ける川柳大講演會では講演以外に、照明を使用して川柳句會を實演した。おそらく句會の實演はこれを以て嚆矢とするであらう

今日では殆んど月の半ばを會合で暮してゐる私としては回顧すれば幾千回の會合に出席してゐることか、殊に遠く旅して異國の句會にまで列席したことが走馬燈の如く眼前をかすめて行くのである。全國

海外各地の川柳人の顔、顔、顔を眼を閉ぢて思ふ時、苦悶と云ふよりもそれは寧ろ懐しい想ひ出の一つである。

多くの句會へ出席したが、ただ一つ今でも遺憾に思ふ句會があつた。それは當時健康を害してゐたにもかゝらはず押して神戸支部句會に出席した時のことである。その時の演題は今でも覚えてゐるが、「爆弾を抱へて來る」であつた。當時「ふあうすと」誌の創刊間のないことであると思

ふが、紋太君から、それより少し以前に神戸支部を廢して支部の人々を呉れないかと云ふことであつたので、「ふあうすと」創立の趣旨を訊いて見た。それが我社の方針と一致すれば、支部の人達が行くとか云へばやつてもいいと思つたからである。

ところが刊行の理由は單に雜誌がないと淋しいから出すのだと云ふのであつた。だから大阪へも支部は設けないと云ふことであつた。その後そんなことは忘れやうな顔をして大阪へ支部をつくつたがそれはどつちでもいゝとして

たゞ淋しいからと云ふやうな理由では神戸支部を廢止することは出来ない。支部の連中

で、「ふあうすと」へ行きたい人があれば自由だが、我社としては「ふあうすと」以外の人たちを相手に川柳の社會化運動をやつて行く必要がある

ので、支部は廢止しないといふ回答を與へた。これは勿論支部の人達を通じて談したのである。こうしたいきさつ

のあつた後の句會であるだけに、紋太一派の神經が尖つてゐたのかも知れないが、神戸支部の句會へ出席した紋太君が私に食つてかゝつた事件が惹起した。
私の「爆弾を抱へて來たる」と云ふ演題の概容は今でも覚えてゐる。それは多年川柳の社會

化を提唱して来た自分としては、今日漸く川柳が社會的に認識されて来たことを欣ぶものであるが、川柳人の數の夥しく増加すると共に、それだけ尤も危険な時期に遭遇してゐるとも云へる。従來川柳を社會が認めなかつた反面には川柳人自身の不勉強も勘定に入れなければならぬ。今や川柳人は結束して己れに嚴でなければならぬ折角認められて来た今日、川柳人の増加によるレベルの低減によつて、再び文化文政時代の墮落期へ墜ちなければならぬと云ふことは寒心すべきである。警鐘を亂打したのであつた。そして川柳への精進は死ぬまで續くのであるし、殊に至つて地味な努力を續けて行くのであるからその覚悟でやらなければならぬことを説いたのであつた。

然るに紋太君はこの言葉をどう聞き違へたのか、食つてかゝつた。そして、その後の「ふあうすと」誌上で讀むに堪えない罵詈雑言を敢てした。支部同人はこれに對して大いに憤慨した。そして反駁文を書いてこれを發表して呉れと迫つて来たが、私はその支部同人が紋太君と目と鼻のところに住んでゐるので、今後の摩擦を思ひ、支部同人をおさへてこれを葬つてしまつたところが支部同人の幹部は私の親心が判らず遂に支部を去つてしまつた。

私はこの事件直後、試みに金澤でも同じ講演をやつて見たが、金澤では何等の事件を惹起せず寧ろこゝろよく聴い

てくれたのである。私の手許には今でも支部同人の書いた反駁文が残つてゐる。私は何處までも柳界の平和をのぞんで、このことは發表しないつもりであつたが、「ふあうすと」誌に残るあの一文が後世の柳人を誤解せしめるのを懼れるためこゝにこのことを書いて置くことにした。

由來紋太君は謙恭な人として知られてゐたがこの事件に對してあの下劣極まる言辭を弄されたのを見てその謙恭になつて疑ひをさしはさむやうになつたのである。人間は誰でも慣れると先輩に對する禮を忘れ勝ちになるものであるが、従來川柳人の一部にはこれとにそれが甚しかつた。紋太君の如く、誰にでも謙恭な人であると思はれてゐる人である。それがあつたのであるから他にそんな人があるとしても不思議ではないのかも知れない。川柳雜誌社では、そんな人たちを寄せつけないので、まことにうれいことである。と私は思つてゐる。

私の手許にある常安橋時代の書簡の名宛には、路郎先生であり、その後路郎様であり次には路郎君である。そうして爆彈事件一年ほど前のヘガキには「貴兄の爆彈のやうな聲を聞きたい」と云ふことが新年早々に來てゐる。私は先

生と呼ばれやうが、オイと呼べないが、その人の心境がそれであつてはいけぬのではないかと思ふ。重ねて云ふが紋太君にして斯うした態度を惜しむだけである。しかし、一社を引つさけて立てば、いんな事件にぶつつかかるのも敢へて不思議ではないので、それ等を一々こゝへ發表せうとは思はない。

が昭和十一年六月には一舉にして、社を深淵に投げ込むやうな事件が起つた。私は監督の責任上、主幹辭退を同人會に申出た。どんな事件であるか、發表の限りではないがそれがために同人會を開いて社運の挽回策を講じることとなつた。しかし同人の誰もが社を背負うて立たうと云ふ人はなかつた。結局、私に善後策の質問があつたので、今後の經營に對して三案を提出した。その結果、最後の一案である路郎の個人經營に落ちついた。

これは以前から考へてゐた

「専門家なき世界發達せず、能はざるにあらざる、爲さざるなり」と云ふ自己の所論の實踐に外ならなかつた。そして同時に斯界の隆昌と交歡のため、内地は勿論海外柳人までも網羅した川柳人協會を興した。

同人制を廢して社が私の個人經營となると同時に直接門下のみによる不朽洞會が生まれたことは周知の通りである川柳職業人宣言は全柳界の問題となつたことは云ふまでもない。「そんなことが出來ますか」と笑つた人々もあつた。川柳人外の知己からも無暴の舉ではないかとひそかに危ぶまれ、私に新しい職業を斡旋せうとされたが、私はその厚意を謝して自己の信ずる道へひたむきに突入した。

私は社外の従來の川柳人を目標とせず、ビルで徹夜までして社會と四ツに取組んだのである。私は獅々奮迅に働き抜いた。この時にも時々ビルを訪れた東魚君から「オイ摺切れちや駄目だぜ」と忠告されたほどである。私は友情のあつたものを感じながら遂に闘ひ抜いたのであつた。この間眞に私を援けてくれたのは川柳人外の友人であつた。私は感謝した。不朽洞會員も結束を固うして私について來てくれた。その點私は常に幸福

を感じた。家人も一つになつて働いた。殊に腹乃は最も不得手とする會計や廣告部のアツシスタントを甘んじて受持つてくれた。尤も十八年の初頭に於て斯うした仕事を子供達に譲らせ後退させた。社員中では、僅な日數ではあつたが、渡邊曉重君が健康を害するほどに働いてくれたことは忘れることが出來ない。社運は日にたかまり日支事變中も大東亞戰爭中に於ても何等不安を感じずに今日に及んだのである。しかし滿二十年の本年末に於て終刊とする豫定は本年の早春に於て既に意を決してゐた。そして秋に入つて着々と準備にかゝつたことは「一路集」を撤したることによつてもうなづけるであらう。

書きたりといはまた幾らでも最後が紙數に限りがあるもので、最後に近衛内閣の新體制當時大阪に於ける柳誌の整備統合に就て慫慂をうけたが、我社だけは唯一の有保證新聞紙法に據る刊行であり、職業人として立つてゐるのでアマイチヤリの柳誌とは全く別箇に考慮された當局の措置を今もなほ感謝してゐることを附記したい。そして本誌が日本唯一の有保證新聞紙法によつて刊行された柳誌であることを、今もなほほゞえましく思つてゐる。(終)

これは以前から考へてゐた



川柳塔 路郎選

大阪橋本緑雨

駐屯の久しきになり種を播き
幾日か空を眺める未歸還機
霜の降る師走八日の陽を拜み
學童の決心母も動かされ
薬瓶早くなほせよ國の爲
川雜も自爆輝く二十年
郷里金石港金澤市編入
金澤が山から海へ續くなり

岐阜にて

洗顏に河原へ走る長良川

福田山雨樓

山と空太古の色の木曾路行く
西陽映え山も田圃も水彩畫
筆談へ疊の上のキリギリス
木曾の寒さを神國と見き
増産の一歎遙か富士が見え

大阪西田艸樂

奉仕隊よその田圃へはみ出され
廣い田を一人耕す誰が妻ぞ
嫁くことを窓に相談する如く
蕪の芽へ檢視のやうに母と娘と

大戦果申譯なく老ひにけり
老父老母御代の榮へ生きて居れ

芦屋寺井鏡々

旋盤へ今は指環の手ではなし
一着の服で精勤賞を受け
日曜の父板を切り釘を打ち
笑うてた夫人モンベが好きになり
こほろぎが這ふ疊ひとり寝るとする
屋臺店へ妻もすなほに従いて入り
住宅の廣告切抜き三月經ち

長男入隊

兵に征く子と語る父が柿をむく

大東亞會議

歴史には菊の會議として残り

兵庫戸倉普天

氣がせいと居るに社長の訓辭なり
紋平をソレ者らしうにはきこなし
戦闘帽着れば敬禮したくなり
學徒出陣長男様も立ち上り

張家口岩崎柳路

クレオンで繪いた東條さんの顔
よく寝入る此の兒の父は南です

大阪戸田孤篷

先生のお歳定期で見てもしまひ
あやまりにくるに女生徒連がいり
妻楊子までそのまゝにある亡父の服
ほんとうの批評を夫淋しがり

大阪中島生々庵

藥石効なくまだ死にたくはないの也
まつさらの目めぐり之れが人世か

又今日から三百六十五日かい
榮轉でもする氣引越し好きになり
詩だの夢だのストローで飲んだ日もあつた
ケーブルにあなたまかせの腰を掛け
ケーブルで相濟みません神詣で
ケーブルの綱一本に目をそらし
俺に似た涙もろさをはがゆがり
ありていに云へば貸さぬはないの也
藪醫者へもう死にそうにばかり見え
お淨土は近いが薬も召し上げられ
末つ子のへつらい顔がふと寂し
百の世辭聞くより俺に母があり

四十五回誕生日記念寫真

身構へが心構へを待たずふけ

尼崎水谷鮎美

稻刈へこちらにも蝗たんととり

法事にて歸郷

配給の酒御院主も少しうけ

〇〇方面に勇躍する猪野君へ

眼にものをいはしてくれる門出なり

軍需工場へ轉じた姉妹へ

姉妹の影飛行機は上をとび

兵庫西川青美

學徒應召

ペン擱いて剣とる男の子自若たり
ヤアヤアと剣とる學友は訪ね来る
角帽よさらば吾大空へ征く
觀光ホテル此所も働く人の寮

學徒長男入團

今日の日を待つたが光陰矢の如し
死場所を選べと我子送り出し

大阪乙谷乙平

川口 伊古田 伊太古

満員車操典を読む隙も無し
休閑地大根の葉の躍るさま
警報の 瞬時光芒 空を這ひ
學徒征く都の西北天とゞろ
子の沫きよけく風呂の隅に居る
角隠しせず乙號によく似合ひ
擧手の禮友星一つ自然なる
受けた子を髭へ持てく歸還兵

友出征(二句)

大阪 中 村 聖 司

さて云ふとなると末席かしくせず
當人が来たに物識りまだつゞけ
おゝそうかいやかと一人ほつとかれ
大賛成然かし出すとは云つてこそ
卓説は述べるが御飯を食べるだけ
さあこいと構へりや獸米向きを變へ
おゝそうかやつたか亦も轟沈か
天下筋質屋に馴染出来ただけ

大阪 木 下 幽 王

もうかりまつかと問へば本當に怒りだし
俗化した故郷に何をか語るらむ
待避して都會の土の白さ知る

大阪 福 田 妄 夢

顔中にほくろがあつて多情もの
歴史てふ大きなものを論じ合ひ
身分證明持つて雨の中を行く
「福田です」ふんと云つた顔をさる

甲種です成程と云ふ顔であり
弱點を見られてからは冷たすぎ
朝々が楽しいふゆの戀なりき
草案を練る間に硯乾きけり
ゆける君ゆけぬ僕握手して別れ
今はもう他人となつた手紙あり

西宮 加 川 泉 泡

なり振りをかまはず献金 たんとした
嫌味さへなけれや とつぐに主任さま
抱いた遺児 背の遺児 母は強く生き
にくたらし顔してまんなど俘虜をみる
メガホンがころがり 彈丸切手賣れて居る
曼珠沙華すねた女のやうに枯れ
温顔の場長さまも霜をふみ
いかだ師もみよ 東海で川下る

井魚氏應召

征く君の机に塵の一つなし

大阪 井 關 惠 美 須

一坪の空地へ待避壕も掘り
勝つ國へ住み 恙がなく年も暮れ
召され征く男同志の手の温み
満員車林檎を落す餘地もなし
棲を取る手へ勤勞の鎌をもち
前線に君あり 銃後俺がゐる

大阪 唐 津 朝 美

交換船 早東海の 香り吸ひ
朝霧を突いて流がれる銃の音
社長秘書陣頭指揮へ 早出なり
大君の邊にこそ死なむ聲で征き
家系圖が夕陽の 椽へ持出され

大阪 新 川 博 也

ブーゲンビル島沖海戦

大阪府 川 村 好 郎

二階からすべつて降りた大戦果
父もまだ床に入らずいゝ月夜
定期券期限が切れて醫者を變へ
日の丸へまづ學長は筆をとり
大吉もあたりもせず十二月
姿だけ又褒められて見合すみ

大阪 西 垣 錦 風

補充初年兵を迎へて

初年兵三ツ違ひの兄も有り

歸還の感激

二年目の祖國を見入る汽車の窓
遺骨まで約せし戦友と歸還せり
有り餘る力を持つて歸還せり

福岡 松 村 夢 裡

豚兒徴用願出で

召されゆく子の眞情をうたがはず
だあまつてニユースに腫る眼と眼

大阪府 榊 田 松 緑

自轉車の稽古もしてるお寺の娘
組長が 一番若い ととなり組
英靈へ坊やの帽もそつとり
年寄へそつと手をかす女學生
モンペーを穿いてた方が女給なり

尼崎 土 産 光 洋

編物がいつち自慢の女事務
公民の本など讀んで女事務
積極な態度工場を明渡し
晩秋と云ふ病室の窓硝子
字も上手要領もよし軍事便

大阪 市 場 没 食 子

奇蹟より外にと醫長言ひごもり
歸農する話に妻も遂に折れ
作業班などあり鍛ふ療養所
寄る歳と言おうか威嚇の眼がにぶり

名古屋 吉 田 水 車

官城を大根 畠から拜み
收穫の鎌をかざして兵送る
氣安さは富士の初雪仰ぐなり

義弟再び南方へ征く

二度び征くはなむけによし大戦果

大阪 須 崎 豆 秋

しあわせな椰子よ 殿下と撮される
にはとりの夫婦が暮すビール箱
法善寺鼻をつまゝれそうに抜け
軽石も嫁入道具もつてゆく
こんじやくのカラシが利いた北ツ風
日曜で急性肺炎診てくれず
さんばつ屋仕事にかゝる巻脚絆

大阪府 宮 岡 白 峯

大戦果老眼鏡をはづしてみ
君見給へ大平洋のちぎれ雲
禪もしめてと徴用送つとき

松本 石 曾 根 民 郎

印刷業企業整備發令(二句)

活字 彈丸となる日來れり愛撫せむ
米英を撃つ 彈丸ならめ 活字征け
指を繰る暇は見付けず刷りつゞけ
戦況を聴く炬燵あり子を並べ

戦ひのさなかの新嘗祭(三句)

新穀に恩と汗知るいくさして
みいくさに應ふ 新穀揚のなかに
時の言葉米一粒は出来 ぶり

海鷲アツツ鳥強襲して山崎部隊の
靈に花輪を献げしといふ

花輪みなアツツの 土に應ふるぞ

出陣學徒におくる

千柿の軒を残して學徒征く

大阪 正 本 水 客

一汽車を待つて待呆け柿をむき
接續の悪い支線で風邪をひき
さすが時局熱海の夜は月許り

豊中 黒 川 紫 香

袖切つて手提袋を一つ縫ひ
供出を見送る人の煙管だこ
美しい齒並で話す女 事務
組長となり表札を書き直し
勝つ爲だ首に濕布をして出かけ
もう一人待つ座布團へ猫ねむる
工夫したモンベを見せる 露路の口
弟に辭書を譲つて學徒起つ
買物籠提けて戦果へ立止り

茨木縣 丸 尾 潮 花

窓際の別れ戦地へ行くような
留守中を宜敷たのみ脚絆巻く
嘘を書く男の筆のやはらかし
トランクの上で 故郷へ二通書き
花嫁の便りへ寮は湧きかへり
一信は筆を揃へて妻へ書き
無精髭こんな自分でなかつたに

勅 題

大阪 尾 崎 方 正

太平洋日の出は同じ波さわぐとも

大東亞會議

共榮圈隣のやうに飛んでくる

西征へ次は印度が醒める番

大きいことを云ひなさんなよチヨボチヨボさ

上席は案山子のやうに動かない

下關 櫻 川 不 水

シヤツ巡りく 女房の腹巻

洗濯の返す腕は 鎌を持ち

一塊の炭も 尊し 十二月

川 雜 奉 還

撃滅の一途あるのみ誌を献す

義妹華橘へ寄す

勝鬨の中にむすほれたるふたり

大阪 菊 澤 小 松 園

慰めた言葉のはしが氣にさわり

要點をほかす程度に任かされる

順禮の笠が傾くよい 時 雨

徴用の後ろ姿に張りを見せ

大阪 清 水 史 路

殘業も勇士殺さぬ爲と知り

萬葉を送れと海の 軍事便

盗まれるほどになつたと休閑地

量もまたものを言ふぞと歸還兵

老ひぬれば妙になつかし京訛り

伊 降 伏

足弱と別れ大きく息を吸ひ

大阪 清水 白 柳 子

メガホンの號令 謡曲 仕込なり
愛想よく言はれ財布のありどころ

靖國神社臨時大祭

有難さ國旗を出す 日續くなり

大阪 中 内 翠 芳

木枯に裾を吹かれて走る娘等
今日非番何時もの代書頼まれる
ボツクスで己れ米機と蚊を叩き

下 田 多 田 市 多 樓

聞でない荷物リヤカー貸してやり
たきと取る妻の武裝も面白し
ビクさけて自給自足に行くと言ふ

廻 路 夷 一 笑

けんろくにしても娘は娘なり
ポーナスを半分國へ捧げたり
物干へみじかひ秋をむだにせず
十二月八日の朝の陽が赤し
旗出してみんな出てゆく農繁期

大 年 田 高 田 抱 逸

地下千尺で知つたギ島の大戦果
債券を征く氣できばる女床
週報のとほりにやれば貯蓄でき
停年を露天で越した靴磨き
食慾の秋を過した妻の腕

京 都 府 阿 萬 萬 的

コスモスが手を洗ふ眼に美しい
よく喋るなあと區長も交りに來

尼崎 小 林 文 月

交換に乗らず異國に強く生き

大阪 浪 玲 之 介

内の子も父の自慢をして遊ぶ
體當り世界歴史を書いて散り
喰物の話を避けて國思ふ

男兒流産(二句)

後取りが醫者のピンセットにとまり

二太郎は我が人生に觸れたとけ

投けた石 波紋何處まで行つたやら

想恩師藤生先生

時艱にして宗教家の奮起を求む

坊さんの仲仕の様な腕を見る

大阪 河 野 夜 王

大本營發表、地球儀へ寄る 父子の瞳

アメリカ海軍

タコの巢になる艦作る忙しさ

長男海軍に在り

少年兵もう靖國へ行く氣なり

次男三男兄へ續く氣續かす氣

野分吹き吹くアツツの恨忘れざり

大阪 武 部 香 林

どの部屋も勅諭將軍清く住み

三人掛け娘のところが羨やまれ

軍需々々 働く音に なる女

勝つ爲の煙がつゞく工場街

居眠りをするには惜しい海が見え

應召はまだかまだかと吞仲間

一言の無駄も喋らず軍需工

新兵は四角になつてそばへ寄り

敵の首提けて戻つて欲しい留守

大阪 上 田 翠 光

みかへらぬせなに決意を忍ばせる

妻の手に遺髪を渡す瞳が笑ひ

白刃をかざせば鬼神もさけたまひ

みてほしい姿さ 馬上ゆたかなり

行軍のやすみやすみに子の寫眞

津 山 河 田 一 將

モンペーの創意の靴もよろしかろ

鐵道まで這出て蟻死んでゐた

報 國 隊 男 に 勝 る 步 調 に て

征く國の語學へ舌が短か過ぎ

妻からの便りちよつくら殿をつけ

起床々々 兵舎が起きた騒然さ

戦況を告げる兵士の平靜さ

決戦の秋に 軍 服 着 る 誇

書き遣す事は子のことばかりなり

千人針の結びをしかと肌に觸れ

京 都 明 石 柳 次

風呂までの道も戦ふ暗さなり

武裝した妻武裝した兒を抱き

一列送水辯護士左官茶の師匠

大 阪 水 谷 竹 莊

一人旅戀に似たもの棄てて來る

新世帯まだキミキミと嬉しもう

請求書これは二階の人ですの

小包の字がにじんでる秋の雨

尼 崎 長 谷 川 三 司

武玉川研究

(二三七)

梅 本 東 子
森 鹿 省 二
姪 魚 山

五 編 (一九)

(310) 都鳥餅屋から汲む水てなし

省二「都鳥」は酒に掛けた技巧「酒になる事のはじめは都鳥」(武14)。「餅屋から心の付ぬ隅田川」(武9)

東魚「都鳥の浮いてゐる隅田川、官戸川の水は酒になる水なのだ。餅屋の汲む水ぢやないと云ふ洒落氣分であらう。

塵山「浅草並木町の山屋で賣つた諸白隅田川といふのは、當時の名物であつた。都鳥といふ酒の名を聞かぬが、猶且隅田川のことであらう。

省二「仰せの如し。柳樽四五篇にも「氣違水もひんのよい角田川」とある。京傳も隅田川の諸白には仁王尊も涎を流す、濡佛も舌打をする。大佛餅の甘味あれば大榎も口をあく浅草餅の美味もありと云ふ。即ち大佛餅や浅草餅屋から汲む水ではなく都鳥といへば隅田川だ。その水を汲み醸造する。「角田川うきねの鳥の下戸ならず」(武12)である。江戸

塵拾には、隅田川諸白、本所中ノ郷備後殿下屋敷の井の水を汲みて製す」とある。「都鳥飲んで足まで赤うなり」(古狂句)。官戸川は内田醸造花暦八笑人には持出される。

(311) 日頃のうそか傘としれ

省二「口巧みに女房を丸め込むでゐたのに、ある折借りてきた傘で隠れ遊びの嘘がバレてしまふ。「傘で日頃の嘘ががらり知れ」と川柳にはある。粟下駄で露見する句もある「借りたところが言へぬ傘」と云ふ句もあつたと記憶する。

東魚「全くこれと同じ實例を、友達に知つてゐる。それも川柳人である。名は秘すべし」。

塵山「證據充分、辯解無用。

(312) かふるの十五おとろかれぬる

省二「二になり三に成れば厨子に入れられ、間もなく縁が松に成る。女の子の成育は早いもの、モウ十五とは、と驚く。東魚「風の音にぞおどろかれぬる」の、調子を借りた處が洒落れて

る。

塵山「昨日までも青涕を垂らしてゐたが、今年はもう十五になつたかと標客が驚くとであらう。

(313) 手振の響の氣ハ土産也

東魚「裸一貫できた響の氣立てのよい處、それ丈けが土産だと云ふのである。

塵山「手振り編笠で響に来る」といふ諺がある故、何一つ持たずに来る響である。

省二「御尤である。「手振編笠」であつた。無一物である。

(314) 皆むた言の人參を買

省二「高價な人參を吞まさればならぬ時は、最早助からぬ容態なのだ「むた言」は集つて相談をした結果無駄だとなつても、看護者としては人情上最後までの手當として人參を買ふのであらう。

東魚「前説の如くならば、「無駄事」とありさうに思はれる。言葉盡して値も安くして貰はふと事情を述べたが、先方は聞き入れぬまま、言ひ値通りの代金を致方なく仕拂ふたと云ふのであらう。

塵山「醫師は人參を服用させれば平癒すると云ふけれども、それは冗言であつて、全快の覺束ないので、高價にて買求めるといふのかと想ふ。

(315) 棒遣ひ障子を張て歸りけり

省二「棒の手を使つて、障子を破つた爲に。

東魚「こしらへた句であるが面白い。そうもありさうなと思はせる處が、手柄である。

塵山「生兵法の失策である。

(316) 朝貝の葉なら花ならほんど丁

省二「朝顔の葉や花でボンと音をさせる慰みを、京鴨川畔の色街、先斗町の名に掛けた丈けでなからうか嬉遊笑覽に、草の葉を鳴らす事、俳諧口寄草、手を打にけり、豆の葉に穴をあけては嬉しかり。六玉川初篇、鳴して捨る葉に残る月、鳴したる葉には圓く孔あくなり。

東魚「前説の如くと思ふ。

塵山「朝顔の葉は鳴らすことが出来ても、花を鳴らすことは出来ない私は先斗町といふ狭斜の巷の朝景色を詠むだものと思ふ。

省二「自解が誤つて居るかもしれぬが、花を鳴らす事も亦出来る。開かむとする程の蕾とか。咲きしほんだ直後などを口にして吹けば、ボンと音する。幼児には葉をならすよりは、花の方が容易なので、現にやつて居るのを見する。

(317) 吸物させて夜の氣に勝

省二「夜がふけると沈み氣分にな

る、そこで吸物をさせ一寸一杯に好
い機嫌となり、気分を取戻す。

東魚「夜の氣」は冷える氣分で
はないのか、吸物などあたゝめさせ
勿論酒も飲むのであらう。

塵山「青樓の深夜の情景らしい。

(318) 田町で見れハ路次切の海

省二「芝の田町風景。横丁に一つ
づゝある芝の海、の姉妹句。

東魚「軽い面白い句と思ふ。然し
根本は寫生から立上つてゐる。

塵山「横丁の海の方が面白い。

(319) 片口の雨を一盞くらいけり

省二「この「雨」が判らぬ。片口
にあつたのが、酒だと思つたら雨で
あつたと云ふのか。片口で雨漏をう
けると云ふ事があるのにや。

東魚「雨漏を受けに片口を置いて
あつたが、其儘に成つてゐたのを、
酒かと意地のきたないのが、香をか
いでみて、なんだ一杯喰はされたと
云ふ場合であらう。

塵山「雨漏を受けるのに、片口は
餘り小さいが、外に解釋の下しやう
も無い。

(320) 泣時ハかたく、か長く成

省二「袖口の一方で涙を拭ふため
に。

東魚「趣を描き得てゐて、穿ち味な
云ひ表はし方が面白い。

塵山「賣春婦などの空泣か。

(321) 兄弟中を譽るけいせい

省二「曾我兄弟——他の兄弟が遊
ぶ場合にも採れはするが。

東魚「曾我兄弟とみて、面白いと
思ふ。

塵山「大磯の扇、少將をいふので
ある。

(322) 誓文の足らぬ所へ親を出し

省二「誓文を認めても、尙ほ安心
ならず不足なれば、親を立てて固め
る。

東魚「親を保證に立てる意である
塵山「「誓文」と云つても、文書
を認めるのではなく、口頭にて親に
保證させるのであらう。

(323) 長柄持おとりまおとるつむし風

東魚「長柄の傘をさしかけて持つ
てゐるのが、つむじ風にあつてはた
まるまい。

塵山「狂言の「末廣」が聯想され
る。

省二「私が長柄杓と讀むだのは誤
り、原本長柄持である。長柄傘へつ
むじ風では、踊を踊らねばならぬ。

(324) 錢をもたぬも長生キの相

省二「清貧にして悠然として居る
事が出来る程なれば、その風貌は段
々長生きの相を現はしてくる事であ
らう。慾望や屈託がないからであら
う。

東魚「貧に安んずるだけの修養が
出来てゐるので、人相も自然のんび
りしてゐる。
塵山「壽を得ても、福を得られぬ
相である。

(325) 蠅を追せて寝入怪我人

省二「怪我をして血なまぐさい者
には、蠅がたかる。追はせて居るう
ちに、段々神經も睡まり、眠に入る
東魚「前説贊。面白い句と思ふ。
塵山「現代の傷病兵の室内などに
斯る光景が有るであらう。

(326) 鉋屑腹たちそうに燃てきへ

省二「一氣にバアつと燃える。
東魚「趣を云ひ得て居る。
塵山「腹立さうとは、面白い形容
である。

(327) 暖簾の小褌に白い足の裏

省二「「足の裏」をみせて居るの
だから、この暖簾は長いのであらう
黒いのれんに對し白い足の裏との對
照もあらう。——水茶屋風景だと一
層面白いのだが?

東魚「暖簾の小褌と云ふ事はなか
らうから、暖簾の、で切つて、小褌
に白い足の裏であらう。のれんは呉
服店などの表に地につく斗りに張出
してある、其蔭に客が店先に腰掛け
てゐる趣。打違へに重ねた足、その
片足の裏が白々とみゆる(足袋をは
いてゐてもよい)と云ふ、情景と思

ふが、はつきりせぬ。
塵山「前解の如くであらうが、水
茶屋ではなく商店に相違ない。昔の
水茶屋に長暖簾を掛けたのは無かつ
た。

(328) 坐頭の家越さくり草臥

省二「宮城道雄氏の隨筆にも、手
さぐりで家の構造が判るとあつた。
東魚「光をさすと云ふ句もあつた
やうに思ふ。「さぐり草臥」はさう
ありさうで、淡い可笑味の中に、哀
れさがある。
塵山「坐頭が住宅を捜し歩くので
家内を手探りするのではなからう。
省二「こんな句が十二へんに有る
「坐頭の坊飛驒の内匠を撫て見」。
——尙ほ序に「縫ひ紋をさぐらせて
みるこぜの母」。

(329) 人の氣の音に返る風か吹キ

省二「「風」は風習、風俗、世の
趨勢。謂は、流行。時々の推移。
東魚「前説贊。

塵山「自分には確説が無い。

(330) 足元の思案を借りる草履道

東魚「「草履で歩くべき道」と云
ふ意を、草履道と云つたのであらう
か。草履でなければ、歩くを許さ
れぬ道、特に足元に注意すると云
ふ心持を、詠んだものか。
塵山「路上に潦でも有るので、其

處を草履ばきにて行憺むといふの歎
省二 草履道とは、草履ばきでも
よい道の意か。思案ある者には、や
はり足元にも氣をくばるようになる
と云ふのかと思つた。

(331) いた、いて寝る根津の敷物

東魚 こんな結構な布團では、罰
が當らふ位な事を云ふ場合なのであ
らう。
塵山 根津の妓家に、頂いて寝る
やうな結構なる寝具が有つたらう敷
少し疑はしい。

省二 他の澤山にある根津の句か
ら察すると、確に疑はしい。大工さ
んの客が多くあつたといふから、一
寸洒落たのかもしれない。平素用ふる
敷物よりは上等であつたのだらう。
(553) 「いた、いて着る丸山の夜着」
此句なれば十分に意味が通ずる

(332) 師匠へ膳を送るしも月

省二 七五三の祝の際、お師匠様
への送膳。——強飯の句は他にも詠
まれてある。

東魚 七五三であらう。師匠は踊
などの、又は寺子屋の師匠であらう
塵山 袴着の祝膳で、先づ寺子屋
の師匠の許に送るのである。

(333) 顔はかり咄て置てうまからせ

東魚 顔の美しい事を先づ話て、
大いに對手の氣を、そよる仲人であ

らう。
塵山 仲人の甘言に嵌まると、後
悔する事が出来る。
省二 先づ顔が第一でもあらう。
——心は容易に見ぬけぬ。

(334) 手負か歌を讀て騒動

省二 戦で負傷した者が、到底助
からぬ身だからと、歌を詠む(辭世
となるかもしれない)のは覺悟の上の
事——だから周囲がざわめく。
東魚 歌をよむやうでは、死ぬ助
からぬだらうと、看護人があわて騒
ぐ趣。

塵山 手負が歌をよむだとして、そ
れを騒動などといふのは、妥當の詞
でないと思ふ。
(335) 年號も二度かハる勘當

省二 七生までの勘當だ——口先
き丈けで。だから七生を三度もくつ
た息子さへ句になる——と放り出さ
れて居るうちに、年號が二度も更は
る。此位の事は事實にあつたであら
う。短い年號もあつたし。——こん
な句もある。「年號も新造までに二
度代り」。

東魚 さして長い間でなくとも、
年號が二度變ると云ふ様な事は、如
何にも長い間のやうな氣がされる。
まして勘當の身の上では、との心持
ちであらう。

塵山 勘當が長く免されず、年號

の二度更つても、配所の月をながめ
て、一人嘆息するのである。
(336) 人の事頼む時にも抱付て

省二 武玉川の作品中には、「抱
付く」と云ふ表現を用ひたものが幾
つも見受けられる。自分の事なら勿
論、人の事でもそこ迄やらねば、成
就し承諾を得られぬ。「七日目は抱
付く程に祈りけり」などの、抱付く
と等しい用ひ方なのだ。

東魚 抱付く斗り、懇願する意な
のであらう。
塵山 「抱付く」と云ふとも、戀
愛には關係せぬのであらう。
(337) いろは短歌にひしくと合

省二 いろは短歌は、いろは骨牌
の事。譬を身にあてはめてみると、
一々ひしくと適合し訓られる。
東魚 只世の諺といふ處を、「い
ろは短歌」とやつた處が、働きてあ
り穿つた句である。
塵山 いろは短歌ならば、その意
が婦人小兒にも能く了解される。

(338) 隠す事聞ハ角文字ゆかミ文字

省二 二つともじ牛の角文字すく
文字、ゆかみもじとぞ君はおほゆる
こひしく思ひまるらせたまふとなり
(角文字はい、ゆかみ文字はく——
いく也)
東魚 隠事を聞けば、暗號風の答

をすると云ふのを、斯く云つたので
あらうか。
塵山 北廓へ「いく」といふ暗號
である。

(339) 四十から心の猿に毛かふる

省二 四十過ぎての道樂と七ツ下
つてふる雨は止みさうでやまぬと云
ふ諺もある。意馬心猿も四十過ぎる
と功薦は經てくる。
東魚 四十過ぎては、酒石に狂ふ
事もないと云ふ意味合ひにも、とれ
さうに思ふ。前句の趣によるが。

塵山 「毛がふる」は、功勞を
經るといふ意であらうが、たとひ心
猿が狂ひ出して、止まる所を知る
といふのであらう。
(340) 新地が出来て侍の恥

省二 新地が出来た爲に、侍たる
ものが安物買に出掛けるなどは、態
面上恥さらしである。
東魚 新しいものをあさる輕薄さ
侍はそんな輕薄な事ではいけない、
と云ふ氣分であらう。

塵山 自分には句意が、能く解釋
されない。
(341) 棧敷てミれハ咄されぬ年

東魚 棧敷へ挨拶にきた役者をも
ると、年もひとくとつてゐて、舞臺
姿とは大違ひだと云ふのであらう。
塵山 三年の戀も覺める歎。

省二 亭主の方がまし歟。呵々。

(342) 脊中から泣子引出す夢の中

省二 時節柄解釋は遠慮すべき句臭がする。

東魚 末番とみなくても良いと思ふ。背中から引出す、ねんねこなどに、もぐり込むやうになつてゐる子を引出す——引出すと云ふ處に、可笑味と田舎の人の無難作な趣がみられると思ふ。

塵山 柳句の麥畑は、末番に決定されてゐる故、これもそれに相違ない。

(343) 女房の物に冬の行燈

省二 「針仕事行燈へよると女房じみ」などの句の如く、行燈下に於ける冬の夜の裁縫。しむみりとした寂しさ、あたりにももみない気分が現はされてある。——こんな句もある「行燈のひばらで縫ふが娘なり」「行燈のひばらへ女房針をうち」。

東魚 「女房の物に」で、女房一人夜なべをしてゐる事が想像される。塵山 孤影悄然とし、夫の歸宅を俟つ世話女房、それが冬の夜であるから、一層哀れさが深い。

(344) 乙雪もまた母の日に降

東魚 二回目の雪も母の命日に降つたと云ふので、初雪は父の命日に降つたのであらう事が想はれる。

塵山 「乙雪も」と、もの字は有れど、父の命日の事を云はずとも宜からう。

省二 然し「も」の外に「また」と加へて居るのだから、父の日の事も亦想はせられる。

(345) 雨もりに百萬遍を筋違

省二 百萬遍の珠数を繰るには、圓陣を作るのが一番都合が良い。ところが雨漏の爲に、そこをよけて坐る。筋違ひに坐る。

東魚 輪に坐してゐる百萬遍の連中が、雨もりのため筋違(室の對角線的)に座を替へたと云ふのだ。

塵山 酒屋である事が想像される。羽生村の累の家でもある歟。

(346) おこりか落ちていやな高繩

東魚 駄勞解さへ思ひ浮ばぬ。塵山 高繩の刑場の晒首でも見たもの歟。

省二 判らぬ。おこりを落すには川だとか海だとか(水に流すの意ならん)のほとりに、草履や下駄を棄てると云ふ迷信がある。(厄落だとか禪を落す句はある)。高繩に捨てたのではないか。落ちたのだから、寧ろ嬉しい高繩であるべきだが、却て高繩が恐しいやうな、いやなやうな氣になるのも、亦人情であるものがある。高繩へ行つたら落ちたおこりが、再びつきはせぬかとの思ひなどもするので。

(347) 夜はかり来る顔にかうやく

省二 顔に膏藥を貼つて居るのは見苦しいので、晝は出ぬのだ。——前句があると其他の事情が知れはするが。

東魚 前説の如くであらう。

塵山 葛城の神ではあるまい。

(348) ゆく／＼ハ雀もあちなものに成
東魚 蛤になるとは、あちな事だとの意。

塵山 進化が退化か、我等には判らぬ。

省二 雀入大水爲蛤——秋季。

(349) 魂のいくつも有を聞たかり
省二 魂は残るをして種類があるとか云ふではないか。それを聞きたがるのではないのか。

東魚 性根は一つたい何處にあるのだと、ふら／＼決断のない人物をきめつける場合か。

塵山 離魂病の噂が生じたので、それを能く聞きたがるのであらう。

(350) 一門をよせてのめ／＼生かへり
東魚 一家一門を枕頭によせて、遺言など迄したのが、助かつて良い方に向いたのであらう。「のめ／＼」と云ふ處に、あまり同情されてゐない人物が想はれる。

塵山 一喜一憂といふことも有る

が、これは生還つて人に喜ばれぬ方らしい。

省二 「のめ／＼」が焦點。

(351) 堪忍のいつち仕廻に肌を入れ
省二 街の喧嘩などでも、斯る場面はある。此仕ぐさは芝居でよく見せられる。

東魚 きをひの有り來りの喧嘩の場合である。

塵山 裏長屋の一風景でもあらう歟。

(352) 牛房一重御蘭ほと振る

東魚 御蘭をとる前に箱を振る、あのやうな仕草で、牛房の重詰をゆすつて落ちつかせる。無難作な動作が牛房などだから肯かせられる。

塵山 金平牛房などでは、上等の贈物ではない。

省二 結構な解釋である。比喻も面白し。

(353) 長枕我身代ハはなれもの
省二 長枕などする我が境遇は特殊なものだ。普通ではない丈けに又やがては……。

東魚 榮華の夢は、いつかさめる時があらう。

塵山 蓄妾をする富豪でもある



した人の病氣見舞は堂に入り 洲本鳥巢
 かしわ屋で迎へた朝の鶏の聲 同
 挨拶は言譯めいた女客 同
 百姓は良いなど歸る奉仕隊 同
 日の丸だ横濱だ帝亞丸がつく 同
 所を得た様に大根干されてる 同
 殘業を驛の裏から見るベルト 大阪研太
 カンテラの動いて貨車は素直なり 同
 ヒラ／＼と病院船へよる鷗 同
 錢湯の會話旋盤仕上工 同
 久し振り君も勤勞報國か 同
 男ならと口惜し涙の望東尼 大阪美奈子
 氣をつかふ嫁とおんなじ娘^{おんな} 同
 お念佛それから催促狀を書き 同
 著おいて戦果のあとの未歸還機 同
 征つたきり北か南か藤膳に 同
 コスモス^{みななび}なび^{かき}て貨軍通過 奈良縣カズエ
 虫干に贅澤品は隅へ乾し 同
 弟へ餞別持つて改まり 同
 自轉車に乗れる妻なり二十一 同
 袖切つただけではすまぬ決戦下 同
 化けて出る様に鼠が死んでゐる 大阪邦太郎
 二人歩く道を落葉よ逆ふな 同
 大藏省と云はれる方の赤ラ顔 同
 母は泣き父は無言へ子は歸り 同
 秋何處^{モモンベ}に在^{モモンベ}。甲斐々々し 同
 商人の用語しみる世の移り 御影柳秀
 軍屬の父を持つて不肖なり 同
 赤十字幼なじみの娘に出逢ひ 同
 仲人の役を軍醫は買うて出る 同
 慰問文戦果の禮を先に書き 同

書初めの八紘一爲に墨濃し 同
 病んでゐて芥川賞あきらめず 兵庫縣哲水
 二才ですしかし風呂では女です 同
 休閒地虫もつかずにヒマが出来 同
 炭小屋に五日おくれて大戦果 同
 配給所安心せよと軒へ積み 京都春涉
 修身の先生だつた捨ひ主 同
 女事務よ少しぐらゐは笑み給へ 同
 月明り見渡す限り敵を撃つ 同
 義妹結婚
 今日からは二人を寫す鏡なり 貝塚千舟
 逝く母へメロン最後の孝となり 同
 四ツ橋で今日も別れる共稼ぎ 同
 軍事便八日の旗の下で受け 同
 その理想若く連絡船にゆれ 出雲弘樓
 世はすべて技術へ迫る女の手 同
 徴用で来ればこゝでも月月火 同
 西浜石見水害地見舞うて 同
 醫療の品々落下傘で届けられ 同
 夜學生職場の温み持つて来る 貝塚堅一
 講議録十五の空想はてしなく 同
 千人針廻り初めは隣組 同
 男子戦場へ女子進出
 決戦へモモンベに頼む事多し 同
 書店も兵書みつめる身とはなり 荒尾勢柳
 一日歸農ベルト昔なつかしく 同
 古賀さんの寫真もせた大戦果 同
 祭壇へ遺愛となつた日本刀 同
 夜學生書はどこかの軍需工 大阪醉堂
 そこ迄といふ顔付で征つた友 同
 化粧せぬモモンベが僕の彼女です 同

損害發表一年分は出來 同
 かみしめる歸農二日の飯の味 貝塚保
 練成の竹刀へ兄は文科です 同
 人の世の情五線の譜に乗せて 同
 汗と居る人の誠の中に住み 同
 歸還して孝行をする嫁もらふ 大阪葉光
 鑛夫征く給も軍歌で送るなり 同
 女子徴用女尊男卑の國ながら 同
 米海軍
 ユル禪で遮二無二押し。技ばかり 同
 まま母が母で實母を叔母と呼び 芦屋公子
 壁越に隣の不幸知る寒さ 同
 女事務朝は上手にすべり込み 同
 公衆電話からだ取次ほくそ笑ふ 同
 移動した噂、禱の向きをかへ 岡山縣蟻蜂
 捧けたる子ながら便りほしい親 同
 不甲斐なく男蒲團の上で死に 同
 大戦果我は思はずひざまづき 同
 待避壕もう見てくれたお月様 和歌山宏方
 通夜の席もう水臭いことを云ひ 同
 働きに來いと煙突聲え立ち 同
 働けば鐵に匂ひもあると知り 同
 遅刻したその日の門が高く見え 東京白雨
 あの時のままに母校の割れ硝子 同
 疋を貫に直すことから朝の事務 同
 女子青年班長ラツパ吹けるなり 同
 宿直の看護婦さんはつぎをあて 貝塚正起
 電燈を消せばこほろぎ近う鳴き 同
 葉塚が特火點なり子の戦 同
 再起する心八日の巻脚絆 同



| | | | | | |
|---|--------|------------------------------------|--------|---|--------|
| 母親のガンジガラムの荷が届き | 大阪照二 | 子を捧げ孫に教はる大戦果 | 同 | ぶさいくな録の捌き <small>なまこ</small> 奉仕隊 | 徳島縣夕 |
| 應召へ父兄下座で激励し | 同 | 女には泣く手があつて主任負け | 同 | 孫の手 <small>マコ</small> こがヂヤバマチビルマ <small>マ</small> | 同 |
| 壁の地圖この家の主も征つてゐる | 同 | 身送 <small>まよ</small> 身になつて知る發車ベル | 大阪風月 | ニユース撮影隊來る | 同 |
| 軍事便生きてゐるよと見え來る | 同 | よい子／＼國の柱になつて呉れ | 同 | 造材の陣頭指揮を寫される | 同 |
| 夕暮れが親しい物の色にする | 貝塚莊兒 | 海軍志願して | 同 | 挺身隊脂粉追放鐵と組み | 大阪雄治 |
| 故里の星は同じ樹にかかり | 同 | 適任證貰つた胸はそりかへり | 同 | 薬局と縁切りました二十一 | 同 |
| 雑巾 <small>マキ</small> はれりや拭いてやる事 <small>マキ</small> | 同 | 聴診器意地悪をうな 恰好で | 貝塚奇城 | 日々鍛ふ 我に北風もつと吹け | 同 |
| 家計簿は又今月もマイナスさ | 松江祥月 | 爆音を残して船場 ドツと暮れ | 同 | 大垣をはずして寺の 祝ひごと | 松山吞空子 |
| 冬晴れの朝を御召の金卸 | 同 | 看護婦の視線南の雲を追ひ | 同 | 打水は兒等の 役なり隣組 | 同 |
| 命令へしばし隊員 眼をつむり | 同 | すくまいるくせに米英意地を張 <small>マ</small> | 布施千里 | 海軍になりたがる子のよく泳ぎ | 同 |
| 海軍はやつぱり強い 月月火 | 同 | そんな筈はない 不精意地を張 <small>マ</small> | 同 | そこを行くボマード決戦知 <small>マ</small> | 愛媛縣ゆたか |
| 龍骨になれ大鋸が廻ります | 徳島縣庫夫 | ときつける櫛は映畫のピラマ <small>マ</small> 拭き | 同 | 監視哨なるほど空は廣いもの | 同 |
| ガスマスク火星人種の様に来る | 同 | 又來を出しやばり一寸嫌がられ | 大阪府良一 | 歩調とれ 歴史を刻む音だつた | 同 |
| 弾にして呉れと布袋の像も出る | 同 | 嫁入前いやや／＼と嬉しさう | 同 | 月が出て 駈足一層早くなり | 大阪定ひち |
| お習字へ他人の筆のうらやまし | 静岡縣良司 | 嫁入前花嫁 全集 買ひ集め | 同 | 歸還して 聲の大きな人となり | 同 |
| 散髪屋で去年の今日は北支です | 同 | 戦死の貌捧け盡して 淨なる | 横須賀との髯 | 還らざる機もあり今宵も夜業 <small>マ</small> | 同 |
| 戦法がどうのこうのと 將棋盤 | 同 | 飴玉を 髯武者らしく 噛み碎き | 同 | 格納庫二十三時の 月が出る | 熊本縣鶏城 |
| 録の音サクサクサクと 秋忙し | 貝塚陽人 | 艦隊の兄さんと娘に慕はれし | 同 | 歩調とれ 蝗がはじく道でした | 同 |
| 煤煙の空とはなりし勝ち姿 | 同 | 秋雨が降 <small>マ</small> 降つたで故郷のこと | 上海正雄 | ブーゲンビル島沖海戦 | 同 |
| 療院のここも 戦ふ休閑地 | 同 | 船團の煙のあとへ 無事祈る | 同 | 締やすい様にアメリカ首を延べ | 満洲しけを |
| 光芒へ空へ征く子のまたたかず | 貝塚健太郎 | 軍事便母のは一番あとで讀み | 同 | 靴鳴 <small>マ</small> 子も今日からは職を持ち | 同 |
| 茄子一つ二つ 残して 秋の夕 | 同 | ありがたく 描く 火柱 水柱 | 出雲 緑之助 | 學徒出陣 握る師の手の固かりし | 同 |
| 自由販賣 畫の猷立 替へさせる | 同 | 間違ひもなく 修羅の海隊長機 | 同 | 學徒出陣 父母集ふ夜の地圖 | 同 |
| 社長 徵用 其の令嬢も働いて | 兵庫縣葛藤 | ちつとして 居れぬ 戦果 <small>マ</small> 君は征く | 同 | 遙拜の 頬へ 朝日の 美しさ | 今治佳塵 |
| オルゴール 續いて マーチ 大戦果 | 同 | 中折が 捨子の様に 掛つて 居 | 名古屋 呂風 | 遙拜を終へて 課長の 顔になり | 同 |
| 議事堂に 大東亞なる 旗集ひ | 同 | 母の旅行くが 行くまで 家の事 | 同 | 女學校勤勞奉仕隊 | 同 |
| 至近 彈生きて 居るのが 不思議 <small>マ</small> | 中支 巨人 | 八坂にて 祈る 舞妓も 國の事 | 同 | 増産の 重荷を 織手よく 支へ | 朝鮮草雲 |
| 敵艦が 仕掛 火花の 様に 消え | 同 | 雜誌曰く 此の 席空いて 居りません | 愛媛縣 曉明 | 生死なし 抱く 魚雷は 君のもの | 同 |
| 戦友の 便りは 椰子の 汁を 吸ふ | 同 | 荒鷲の 母茶も 花も 知りません | 同 | 末席の まごころ 嬉し よい意見 | 安東勇祐 |
| 見送つたあと七十の 歳でなし | 兵庫縣 長次 | 娘に近く 親には 遠い 北支です | 同 | 夕やけへ 子も 役があり 農繁期 | 大阪三丸 |



煖房はなき事務室のベンに馴れ
 コスモスが咲き女子がまた生れ
 家族主義 寄席中繼で 我慢をし
 行き歸り 同志と思ふ 戰鬪帽
 大字典 妻が使ふは 慰問文
 奉仕隊 流旗なびかせ 稻を刈る
 高文を パスした腕の 荒鷲ぞ
 此の戦果 缺動なんか出来るかい
 ハンマーとお別れだ我召され征、
 待避訓練 終へて 秋空 靜かなり
 還へらねばならぬ 配置(處)誓ふ
 病床で 吹くハローモニカ 軍歌集
 もう金は 要らぬとお茶子 穢(て)居
 學生を 拾つて 朝の 汽車 親し
 羊群の 歸途 フトニ ユース(寫)ま
 かりがねの 飛ぶ 國境 秋を知る
 伊が 降り 北の 防人 腕を撫し
 鍵二つ 勝ち 抜く 日々 の 共稼ぎ
 威張(て)た マドロス パイブ 驅逐(ま)ま
 顔はとにかく 電髪が 目にとまり
 受けとつた 名刺 眼鏡が 要る 活字
 増産 だ鬚をつて よし 延べて よし
 通譯が むしろ 懸河の 辯ふるひ
 海軍へ 長男 次男 志願する
 司令官の 眼に 頼母 しいモンベ隊
 ブーゲンビエル 大勝
 「やつた〜」と 膝の 兒とおどろかし
 移動 警察 夜汽車の 空 氣ビンと張
 強かつた 父に 負けない 日本の子
 踏み越えて 来たこの 廣さこの 戦
 火叩きへ 落葉 止まつて 恙なし 愛媛縣 正佳

同 大阪 笹路
 同 大阪 秋生
 同 大阪 榮實
 同 壽年
 同 貝塚 秀兒
 同 兵庫 縣 春童
 同 安東 秋人
 同 滿洲 青穆
 同 新京 青衿子
 同 宇和 島 迷峰
 同 神戶 小城子
 同 松江 初惠
 同 釜山 大平洋
 同 京都 宕川
 同 同

棧橋に 軍靴は 高く〜鳴る
 行くと言ふ 訊けば 黙(こ)空を 指し
 常會に 寢場所 取られて 子が 轉び
 決戦へ 男の やうな 娘を 育て
 死ぬる 日の 名譽を 空に 懐がるる
 形見わけ 小抽斗 から 出して くる
 月月火 水定期 券 入れ 破れ
 水打つて さて 今日 一日の 假兵舎
 彈痕の 芭蕉へ 露の すべる あり
 雨あがり 日本 の 空が 見える やう
 スコールで 今宵の 飯も 出来上り
 外套を 座敷に とるが お世辭 なり
 銃後を ば頼んで 家事を 云はぬ也
 仲人も 決戦服で 出かけて 來
 異動 鶏小舎 の あるも 隣組
 校庭で やるぞ 頼むと 櫻色
 眼帯に 馴れて 明るい 陽をしたひ
 合格へ 神兵と なる 地圖を みる
 菊花祭 餘生 感謝の 鉢を持ち
 魂を 忘れて 俘虜の 仲仕 なり
 ソフトも う 戰鬪帽の 敵でなし
 大將の あだ名も 嬉し 一ツ星
 壕出來て 飯を 忘れた 子の 戰 愛媛縣 狂以知
 茸山で さては 山家の 育ちよな 奈良 晶平
 聖汗 奉仕
 豊年が 二年 續いた 決戦下 大牟田 平人
 めし 六合國に 捧げる 身が ふとり
 角帽の 決意 堂々 今ぞ 征く 大阪 一環
 退院
 勝景の 中より 今日ぞ 立あがる 大阪 久雄

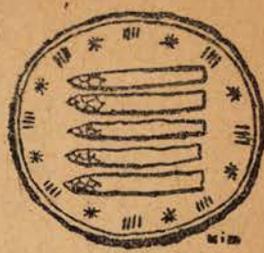
同 貝塚 功志
 同 尼崎 利一
 同 大阪 詩朗
 同 泰 風來子
 同 南方 義春
 同 釧路 孤浪
 同 奈良 縣 翠峰
 同 堺 琴人
 同 濠北 柳兒
 同 貝塚 寒井
 同 大阪 方眠
 同 大阪 掬夫
 同 大阪 晴夫
 同 尼崎 はるじ
 同 奈良 晶平
 同 平行政
 同 中支 拔智

藤膳に 好きな お酒も ついで あり 島根縣 寂涼子
 秋空を ふるはす 様に 脱穀機 尼崎 登美子
 母の忌日に
 糊きいた 浴衣 嫌ひな ボク だつた 貝塚 青芒
 日は 西に 月は 東に 残務の 灯 京都 太虚
 つぎ 當る ことを 市場で 習つて 來 大阪 花鶴子
 ゆく〜 荒鷲 子と 差し 上げる 安東 秋月
 銀世界と 云ふ 北よりの 軍事 便 大阪 史葉
 義妹を 亡ぶ
 年頃の 娘を見れば あ の 娘に 似 大阪 白路
 大戦 果 聞く 夕闇に 殘置 燈 尼崎 一馬
 座右銘 訓辭へ 織り 込む 奉戴日 貝塚 あをやぎ
 針を持つ 手も 無器用 な 初年兵 大阪 實穂
 凱旋の 土産 支那語も 二つ三つ 富山 縣 秀春
 模型機 の 日の 丸一寸 ゆがんで 居 大阪 佳春
 ヨイコドモ 用水桶に 水を入れ 川口 京子
 兵隊さん 慰問袋を あけませう 川口 徹八才

新會員を募る

松坂藝能 講習所 川柳講座 (松坂俱樂部改稱)

▲戦時生活下の常識として川柳を知りたい人
 ▲人間陶冶の詩として川柳を創作したい人
 ▲従來 作つてはいるが、よい指導者がないので一向進 歩しないと思はれる人々
 ▲松坂屋百貨店(日 本橋筋三)の七階にある松坂藝能講習所の麻生 路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、 第一、第三日曜日午後二時から新形式によつて 開講(作句・添削批評講義等)會費一ヶ月一圓 入會希望者は七階の講習所受付へ申込まれたい (川柳講座幹事)



句評

作品二二二

麻生路郎
麻生路郎
須崎豆秋
戸田孤篷

夏海男子はあつち女子
こつち (市多樓)

孤篷「一番に「あつち」「こつち」の配置に目がつきます。男子は「オトコ」でも「オトコノコ」でもなく「ダンシ」であり、女子は勿論「チョシ」でなければなりません。男女七歳にして席を同じうせずの古訓を廣い大海に用ひてゐる。只見ればあたり前の何のことなき海水浴場風景ですが、大自然、海のおほらかさと人生の規範との交點をこの句の面白味と感じます。

いたしますが、あまり見たままの描寫ですので、夏の海的情景を説明してゐるかの如き感じがいたします。市多樓さんの句としてならば、もう少し奥ゆきのある寫生句でないかと頂戴いたしかねます。奥ゆきといふのは、つまり句主の情緒が盛られてゐるとか、或は辛辣であるとか、調子に軽味があるとか何とか、もそつと魅力を持たせて欲しいと思ひます。

路郎「芋を洗ふやうな海水浴場的情景が「あつち」「こつち」の言葉でよく描かれてゐると思ふ。軽い寫生句として採つたのである。

赤禪どのどなたか禮を
され (柳 次)

孤篷「中七の切れ目「どこのどなた」の次に一寸讀むと「に」が欲しくなりました。ところで「に」があると、下五の「され」は受身「して

つた。勿體なかつた。あゝこの一言！出陣學徒の私が最近得た最も大きい感激でした」といふのがありました。征く人達にとつては形式張つた歡送よりは、こうした偶然から受ける感激の方が更に大きく、この句の「どこのどなた」かの一禮にも一しほの嬉しさを感じたことと思はれます。路郎「赤禪即ち征く人が、誰だか知らぬ人に禮をされてゐる情景を見てこの句を詠んだものであることは、葎乃の解釋の通りで、顔見知りでないことは答禮する人の素振り、禮をする人の素振り、判斷し得られることも葎乃の解釋の如くである。知らぬ人の應召ではあるが、心から感謝の念が湧いて、禮をすることは銃後の人たちの心からなる行動であるとと思ふ。従つて「され」が敬語でないことは云ふまでもない。

孤篷「私は句主自身が赤禪をかけてゐると解したものですから、思はぬ思ひ違ひをした事がわかりました。

管制下我が家へ聲を掛け
てみる (柳 久)

孤篷「支那五千年の昔、大禹が治水工事に東奔西走、我が家の前を幾度も素通りしたと云ふ話を思ひ出す。公の自分と私の自分が管制下と云ふ特

別の状況の下一つに融け合つてゐる。我家へ入りこんで腰を下したり、お茶の一杯も飲んだのでは公私混淆などいへ、しようがないが闇の門口へ愛情深い注意の一言を投げ込んだとしてもそれは何人にも共感を興へ得る人間味であらう。尙下五の「掛けてみる」の「みる」には健全な銃後への安心感を以つてさらに前線に力一つばい働かうと云ふ勇士達の心境に似たるものを持つて居り、この人間味は滅私奉公と共存し得る詩美である
 豆秋 二分警防團員か何かで警備に出てゐたのでせう。
 ちようと飛行家が母校か我家の上あたりへさしかゝつた折に、空から聲をかけて見たいといつたやうなのと同じ感じを詠んだものだと思はれます
 葎乃 我家の灯が明いとか、何とか注意を促すためならば「聲をかけ」でよいと思ひますが「かけてみる」とありますから、警備か何かの役で戸外を廻つてゐる際に、ふと我家の前へ來たのに氣づき、夜中の淋しさと無聊をまぎらかすために一寸家の者に些細な用件をこさへて聲をかけてみたのでせう。

手ぬかりがないか、どうかと責任感のあらはれとして、聲を掛けて見たと云ふのであらう。
 赤蜻蛉隣は今日がひと七
 日 (萬龜子)
 孤蓬 蜻蛉と佛事をそれだけで秋の冷さが感じられる。私は此句を素材にして俳人と柳人の心境の微妙な點にふれてみたらと思ふ。これは問題として提議したので、私としてはたゞ此句の川柳らしさを中七の「隣」に見出さうと云ふまでである。句主は隣のひと七日を目で見、耳で聞き、さらに目の前に飛んで來た赤蜻蛉を主觀象徴の道具にしてゐる隣には隣がある、ひと七日を營む家から見れば句主はその隣である。人と人と結びついてゐる世界。客觀的物の表現に満足してゐる所謂自然詩ではおそらく隣といふ文字のこの様な使ひ方はされなからう。
 豆秋 秋といひ、ひと七日といひ、それが身近な隣のことでもあり、一抹の寂しさを感じさゝすには置かない。上五を赤蜻蛉といひ切つて次がなだらかに續き句の構成と全體から受ける詩感などとても立派な句だと思ひます。

葎乃 赤蜻蛉の繊細なからだを見て、作者は秋のあはれをしみじくと感じたのでせう。それと同時に隣家に近頃起つた不幸を思ひくらべて、なほさら寂しさを増したところ如何にも女性らしい句です。
 路郎 前者の評で盡きてゐる
 豆秋 卷頭吟とか發表句數を競つたりする幼稚な活字マニアの多い作家の中に萬龜子さんの句作態度は毅然たるものがあり、その作風は自然を對象とした川柳境地を行く獨特な作家として、かねて敬意を拂つてゐたのですが、こう
 した非凡な女性作家の多くが彗星の如く現はれ、消えてゆく過去の例を多喜女、吟女、武子一等々に見せつけられてゐるので、私は優秀な女性作家が現はれるたび毎に、何も云へぬ寂しい取越し苦勞に捉はれます。

★陣 中川柳

鐵帽と鐵帽かちり合ふ煙草

北羊作
室一郎畫



突撃を間近かに、突撃のあとに、紫煙はゆらぐ。(路)



川柳の近畿

大和篇 (二)

麻生路郎

(豊) 吉野皇居址

★吉野皇居址は藏王堂の西一丁ばかり、金峰山寺本坊の外れからすぐ西南に見える平地

深き谷で向ふの高地にはかなり遠い。東西僅に七十餘間、南北は十間から十七間位しかないが、藏王堂より一段低地になつてゐるので往來から直視の出來ぬ天然の隠れ場所の觀がある。銃砲のなかつた時代であるから斯うした地形が護るのには易いし、攻めるのには難いので、城廓をかねた皇居として最適の地であることは誰にでもうなづける。ここに今は吉野朝官址の石標が建つてゐる。

★吉野皇居址を詠んだ川柳は、
ただからそめの宿と思へど
といふ醍醐帝の御製を拜し
華やかな櫻を斯くの如く詠じ
させ給ふた御心境のほどが偲
ばれる。

では

皇居址今も雲井の櫻咲き

舞臺人なし櫻が散るばかり

同 路郎

★延元元年十二月二十一日、後醍醐天皇は京都花山院亭から内山永久寺に入らせられ、河内の東條を経て吉野に遷幸され一ト先づ吉水院(今の吉水神社)へ入らせられた。と云ふのは當時吉野一山を指導して天皇奉迎の事を決したのが吉水院の忠僧宗信であつたからである。しかし寺域が狭小で群臣の奉仕に不便であつたから當時金峰山寺院集團地で建築の最も壯大であつた實城寺に、翌延元二年の春に移らせられ、寺號を金輪王寺と改稱して假皇居とされた。ところが今の吉野官址の地で、實城寺(金輪王寺)は明治八年に廢寺となつた。

で御踐祚遊ばされた。北畠親房が常陸にあつて神皇正統記及び藤原抄を著し、これを傳献したのもこの皇居であり、正平二年の末、楠木正行が決死の情をのべ、拜謁を希つたのもここである。當時至尊は二十歳にわたらせられ、正行は二十二歳の青年であつた。正平三年に楠木正行が四條畷に戦死し、高師直の軍が吉野山に攻め寄せると聞召され、その來襲三日前、正月二十五日吉野郡穴生即ち賀名生(天皇行幸後に好ましい文字に改めたのである)へ潜幸せられ假皇居は勿論、藏王堂や其他の堂塔伽藍のすべてが師直の軍の兵火によつて焼拂はれた。従つて史に、吉野朝の皇室に關して、其の後に吉野と呼んでゐるのは賀名生を指して居るのである。

★實城寺には寶物記録文書等が多敷にあつたそうであるが廢寺の際に賣却してしまつたので、藏王堂や吉水神社にその一部が残つてゐるのに過ぎない。

(豊) 吉水神社

★吉水神社は藏王堂の東南約三町、本道を左の谷に降るところにある。もとは金峰山寺の一僧坊で吉水院と稱してゐたのであるが明治八年三月に後醍醐天皇行在所の由緒によつて村社格の神社となつたのである。

★祭神は後醍醐天皇を主神とし、楠木正成と吉水院の僧宗信とを合祀してゐる。

★延元元年に後醍醐天皇が吉野に遷幸された際、當寺の住持、宗信法印が僧兵三百を率ゐて途に迎へ、己が持坊である當院に入れ奉つたのである。後醍醐天皇が此の行在所で詠ませ給ふた御製に

花にねてよしや吉野の吉水の枕
のもとに石はしる音
のあることはあまりに有名である。

★源義經が兄頼朝の猜疑をうけ、文治元年十一月に、辨慶佐藤忠信、靜等と、この吉水院に遁れてゐたが、吉野衆徒の追跡が急であつたため逗留五日でひそかに中院谷にのがれ、更に金峰山の方面から宮瀧、宇陀の方へ落延びさせやうとして、佐藤忠信が踏みとどまり、衆徒の首魁横川の前司覺範を切殺して、義經を多武峰に走らしたといふ物語もある。

★吉水神社には後醍醐帝の玉座、源義經潛居の間、辨慶思案の間などがあり、場所柄だけに、昔を偲ぶ遺品に乏しくない。後醍醐天皇の御宸筆や御調度品が殊に多い。義經所有の色々威腹巻や鐵鎧、鞍などもある。武藏坊辨慶の佩刀(行光)や佐藤忠信所持の太刀や兜もある。役小角の木像、大塔宮の陣羽織や猩々毛陣囊、村上彦四郎義光所持の鐵鐔(國寶)、楠木正成公所用の矢筒、豐大閣寄附の獅々頭や銅鐸、蟬丸所持の琵琶などもある。

又前庭には辨慶が斷食して體力が衰へたかどうかを試みるため、指で岩に押込んだといふ辨慶力だめしの釘の跡や義經が吉水院に潛居してゐた時に切り取つて弓の矢に使用したといふ矢竹や、義經が追手をのがれた時、岩壁に残つた馬蹄の跡などが遺つてゐる。又豐大閣が吉野で豪華な花見をした時の宿坊も、この吉水院だつたそうである。

★吉水院を詠んだ句。
山みづの昔もさびしい御潜幸
忠義一途吉水院の奥深く
色々威落人に派手すぎて
同 路郎

(四) 勝手神社

★勝手神社は吉水神社から元櫻本坊を経て約三丁ほど行く道の西側にある。うしろの山は袖振山で、天武天皇の御幸があり神前で琴曲を弾じられたところが天女が出現して袖を擧げて五度舞ふを御覽になつたといふ故事があり、それが五節の舞の起原だと云はれてゐる。

★祭神は忍穗耳命、大山祇命、木花咲耶姫、菅蟲命、葉野姫の五柱の神である。この神々は夷國退治、魔障降伏の神で軍神だとされ吉野八大神祠の一つで式内山口神社のことだと云はれ、吉野山口神社とも稱されてゐるが、延喜式神名帳によると、吉野郡に山口神社は一座しかない。しかもそれは軍神ではなく、木材を切り出す當時の御料材に相當するところに祀る神であつて、龍門莊山口村にあるのが吉野山口神社であるから、勝手神社をどう間違つて山口神社と稱するやうになつたのかは判らない。

★文治の昔、源義經の妾靜が義經と別れ、從者にも棄てられ雪中を藤尾坂で迷うてゐたのを吉野衆徒に見えられ、この神社の廣庭に拉致され、法樂の舞を演じ衆徒の注意を奪ひ義經を落すためにつとめたといふ哀れな物語がある。今もこの神社には靜の當時の装束や、義經の鎧と稱するものが寶物とされてゐる。又正平三年に、後村上天皇が高師直の軍が攻寄せると聞こしめされて吉野から賀名生に潜幸される時、この神前でたのむかひなきにつけても誓ひてし勝手手の神の名こそ惜しけれと詠せられたといふことであるが眞偽のほどは判らない。

(四) 大日寺

★大日寺は勝手神社の前から木戸坂を下つて、中途で右に折れたところにあるので、吉野觀光の人たちを冷んど見掛けないが、村上義光父子(芳岳院忠劍、義光居士、芳春院勇劍、義隆居士)の菩提寺である。今は荒れるにまかせたまことに粗末な寺である。本尊は五智如来(中央大日、脇侍阿彌陀、釋迦、阿闍、寶生)の座像五體で國寶である。不遇といふことは人間ばかりでないことが知られる。

★大日寺を詠む。

國寶はあつても寺は左り前

路 郎

(五) 如意輪寺

★如意輪寺は勝手神社の東北

七町餘、字塔尾にある。今は淨土宗に屬してゐるが、昔は金峰山寺の一院である。本尊は如意輪觀世音である。延喜年間日戴上人の開基で延元年間、後醍醐天皇の勅願寺になり、如意輪觀音は天皇の御信仰が厚く、吉野行在所からしばしば御臨幸があつたやうである。境内には後醍醐帝の御靈殿がある。

★正平二年十二月二十七日、楠木正行が四條畷に向ふ前、戦死を覺悟して、吉野の行在所に天額を拜し、この寺に參詣、先帝の御陵にお暇乞ひを申上げ、如意輪堂の壁板を過去帳と見て、一族郎黨百四十三人の姓名を連書し、堂扉にかへらじとかねておもへば梓弓なき數に入る名をぞとむる

(六) 塔尾御陵

つ、南都の尹(奉行)戸田能登守の臣、實は大垣藩の沼波秀之助藤原秀是とあり、又裏には、美濃の沼波君、石を小楠公埋鬢の處に建て、名づけて至情塚と曰ひ、來りて余の詩を徴す、因りて一絶を石背に書す、曰く(皆漢文)と前書して、

南帝安危繫一躬
力彈躬死見忠雄
既今休說不歸句
却是精神止此中

の七言絶句を書付け、大日本翠亭竺全、拜撰とある。竺全は吉野山大日寺の僧で、碑を建てた沼波秀之助は美濃から奈良に來て、興福寺大乘院の家來多田將監の養子となり、多田仲基と改名、明治二十年代まで生存してゐた人ださうである。

至情塚は辨ノ内侍のものだと聞かされてゐたが、碑文によるとさうでないことが判る

★楠左衛門尉鬢冢碑は御靈殿の門前の一方にある。慶應元年、紀州の藩士津田監物正臣の建てたもので、文は大和の森田節齋である。津田正臣は楠氏の後裔だといふことである。

★鐵石先生招魂碑は本堂の向つて左側至情塚の隣にある。藤本鐵石は天誅組の總裁であり、事破れて文久三年九月廿

五日落命、年四十八。碑は明治十四年に建てたもの、村上善の撰文、中沼了三の篆額である。

★如意輪堂を詠む。

討死をしたて屍の歌が生き

路 郎

★塔尾御陵

★塔尾御陵で詠む。

尊氏を罵る聲か松の風

竹外は花を拂つて立ちわかれ

路 郎



經 人 凡

魚 東 森

死ぬ方へ生れ出たのさそりや

さうさ

極りきつた事だ。生れたら死ぬと云ふのは嚴肅な事實だ。生れたと云ふ事がつまり死を約束してゐる事なのだ——此の解りきつた事を、自身自身に、さう云ひ聞かせ云ひ聞かせする氣分で、諦め得たかのような心持ちで、こんな句を日記の端に書き添へてみた處で、畢竟は偽りだ。矢張り、愛兒の死を諦め切れぬ凡夫の世迷ひ言だ。泣き度い氣持ちを泣くまいとする負け惜しみに近い空虚な聲だ。何か腹の底から盛り上つて来て胸を塞ぐやうな思ひ、さうした心持ちに惱まされ續けるのが、兒を失つた親と云ふもの、凡夫と云ふもの本當の心持ち、消し難い悲しみ、哀れな執着と云ふものであらう。昭和十八年六月廿六日次男修二は、二

十年の生涯を終つた。

死ぬと云ふ事は思はず乳を飲ませ

ませ

何日かは死ぬに決つてゐるもののみひたすに、いとおしひ、はぐくみ來つた親ではなかつたか。所詮は死ぬと決つてゐるものを——哀れと云はふか、愚かと云はふか。

修二よ、お前の二十年の生涯は全く夢い短い生涯であつた。然し育て來つた親としては、此の二十年は決して短い氣がされない。別けて、母親にしてみれば此の感は一層深いであらう。

修二よ、お前も無殘念であらう。私も誠に殘念だ。この未曾有の重大時局、民族の存亡を賭けての大東亞戰に銃をとらねばならぬ若者の病の爲に斃れる事は全くお國に申譯のない思ひがひしひしと迫る。然しお前

は、既に醫者が回復の絶望を宣告してゐたのも知らずに、母に、「癪つたら兵隊にはなれるだらうな」と云つたさうだ。私は其一言に打たれた頼もしい者だと思つた。さうしてお前も立派な日本の青年だと思つた。可愛い奴だと思つた。死を數ヶ月の後に運命づけられてゐるのも知らずに「癪つたら——」と思つてゐるお前の心持ち、癪つたら、お國の爲に一兵卒として立上り度いお前の心持ちそれが、哀れにもいぢらしい。

あはれ云ひき癒えなば兵に召されんと

修二よ、お前が到底再起出來ない事、然かも二三ヶ月の餘命である事を醫者から聞かされたのは三月一日の夜であつた。夫れ程に悪いと云ふ事を知らずに居た迂闊さ、愚かさ云ひ知れぬ腹立しさが湧き上るのを覺えた。若しあの時、私が酒氣を帯びても居たら、矢庭に醫者を擲つたかも知れないとさへ思つた程である。醫者が、「施す處置がありません」と云つた言葉、地獄の聲の様に恐れ戦いて、地を踏んでゐるのか、雲を踏んでゐるのか、分らぬ氣持で家へ歸つた私だつた。

日本醫術の權威を理解してゐるからには、遺憾乍ら醫者の云ふ事に間違ひはないのだと思つても、何か其處に奇蹟的な事があり得るのではなからうかと願つたりする心持を押へられぬのも、哀れな親心、凡人の凡慮

であらう。

子の上へ奇蹟の話ひきくらへ

修二よ、三月十七日の夜、翌スは阪大へ入院するお前と別れて、速く勤務地北京へ歸つて行かねばならぬ私は、全く辛らかつた。出發前の僅かの時間をお前の枕元で過した時、お前は職業野球の事などを私に話したね。入院中の用意に小遣ひを渡してやつたら、常々乏しい小遣ひに不平も云はなかつた滋味なお前は、案外な顔付きで「濟みません」などと何時になく改まつて禮を云つたね。これ切りもう逢へないかも知れないのだと思ひつゝも、私は戯談まじりに懇に闘病の事などを云ひ聞かせたのだつた。

氣安めの喉腹でなき腹で泣き

阪大病院での診断も日頃掛りつけのM博士の言葉と全く同じであると云ふ意味の電報を受取つたのは、北京へ歸着して間もなくであつた。電報の短かい文句の中にも、母の絶望の吐息が、まざまざと聞きとれるやうな氣がされ、私もはつきりと悲しい諦めを自分自身に強いねばならぬ事であつた。然し出来るだけの手段——自分の經濟の許す限りの——手段を何でも取つて貰ひたい願を、みすみす無駄であらう事も敢て試みて頂き度いと云ふ旨を、特に病院の醫長に申出たりした。正に溺るゝ者の薬にもすがり度い思ひである。

院長の目に親馬鹿の衰れなり

修二よ、お前はさうした永い間の病床に横はりつゝも屢々母に、私に對する感謝の言葉を洩らしたさうだね。お前の病勢の變化を、假令遠隔の地に居るとしても、等閑りにした不注意な父、愚かな父を恨めしくも思はなかつたお前を一層いぢらしく思ふ。殊に、私が物資の豊富な北京に居たお蔭で、チヨコレートやドロツブなどお前の好むものを少しでも提供し得た事をお前は大變有難がつて喜んで呉れたさうだね。それは今私のせめてもの心やりだ。或時、お前は母にかう云つたさうだね。「丈夫になつたらビール會社へ勤めやうか、せめてお父さんに好きなビールの少し位融通してあげられるかも知れない」と。私は嬉しく思ふ。「大きくなつたらビール會社の社長になつて、うんとビールを飲ましてあげるよ」などと戯談に云ふのは諱が違ふ。お前は、本當に實行出來さうな事を考へてゐたのだ。さうして何か私に報いやうと考へて居て呉れたのだ。私は其心持を嬉しく思ふ。昔、養老の瀧水は、孝子の思ひで酒になつたと云ふではないか。

番茶でも良いよ 麥酒の氣のする

時は容赦なくたつ。お前の病勢が益悪く、醫者の豫測の如く梅雨近く愈危険になつたので私は又、北京からわざわざお前の枕頭へやつて來た

のだ。社用ついでに來たやうにお前には云つて置いたのだけれど——それから約一ヶ月。私はお前の死を待つ爲のやうな、憂鬱な日々、落ち着かぬ日々を送らねばならなかつた。

骨と皮なほ生きんとし生きんとし

全く、體と病菌との痛ましい争闘だ。争闘に敗れ去る哀はれな壊滅だ。然しお前の心臓は根強く頑張つてゐた。もう駄目らしいと云ふ日を屢持ち直して居た。けれど畢竟は消える燈の最後の瞬に過ぎなかつたのだから。

科學の目逃した匪賊にしてや

憎むべき病菌、匪賊のやうな奴だ。現代の世界に誇る日本醫學の天網を潜ぐる匪賊のやうな奴だ。

修二よ、お前は斯くして最後は凡てを諦めた平和な面もちで、父母と兄とだけに見守られて靜かに呼吸を引き取つたのだ。本當に蠟燭の燈の消えて行くやうに——

ほとゝぎす血も吐き得ぬが最後也

あはれ凡ては了つた。「矢張り醫者の云つた通りだな」私は誰に云ふともなくかうつぶやいた。何か冷たいものが全身を這ひ上るやうな心持がした。

死期を云ひ當てる科學は懐めしい

修二よ、靜におやすみ靜におやす

み。私はお前の枕元で、お前の病床に在りし日の思ひ出を歌の姿に委ねて詠はう。幼き折の守唄とも聞いておくれ。凡人の唱へる經文とも聞いておくれ。では修二よ——靜かにおやすみ。

誕生日迄生きられるかと云ひし子の面影見ゆよ今日は其誕生日(七月十日)その小豆貯へ置かせ誕生日に喰はんと云ひし汝あらずはや

枕邊に大き樽握多魚伺ひて釣せばやなど笑ひぬ汝れは

病院へ入ると定めしその日かも吾れと鬚剃りぬ心晴れしか

「かまきりも顔負けせんに」かく云ひて瘦體抱き見上げぬ父を

癒えん日は斯くも斯くぞもと望みつゝ苦しませば死度しとしも云ふ

齧喰ひし名残りの日なりその齧のあなごが、うまし「おうきに」と云ひき

來年は又花見んぞ鉢の百合庭に植うべしと云ひし汝はも

何しかも半七捕物帳が讀み度しとふと云ひ出てぬ死の十日前

床ずれが痛し痛しと打ちわびぬ古羽布團敷きなづみつゝ

「孫の手」の如くも瘦せし子の腕の脈どこさぐりつ涙すわれは

一合 掌

(昭和十八年九月彼岸中日稿) 次男修二、はしなく胸を病みて靜養約三歳、昭和十八年六月二十六日零時二十分遂に逝く。此の重大時局下にあ

りて銃を執つて立つ可かりし青年を、空しく病の爲に失ふ事、誠に遺憾の極み也。元より私情、哀惜の念堪へ難きも更に又、公に君國の爲に醜の御桶となり得ざりしを哭く。あはれはくくみ來りし二十年、顧みて短かしと云はんか長しと云はんか、感慨頻りに涙と共に湧くを禁ぜざる也。即一文を草して亡兄が靈前に檢香合掌を捧げ、以て其冥福を祈らんとす。願くは見る人、頽齡一個の凡人が、憤懣愚痴の繰り言を笑ひ給ふ勿れ。

昭和十八年十月三日 (稱哲修信士百日忌)

北京假寓に於て

森 東 魚 誌

大 阪 心 齋 橋

そごう

戦時下の生活必需品を網羅して



初等川柳講座

(一五)

麻生路郎

省略法の句に就て

思想表現の明瞭さ正確さを失はない限り、無駄な語句を省き、敘述を簡潔にして、言外に意を含ませうとする方法を修辭上省略法と稱して居りますが、この方法は散文よりも寧ろ短詩型に於て、より以上に活用されて居ります。殊に川柳に於きましてはすべての句がこの修辭によつて生命づけられてゐるのでありますから、川柳の敘法の研究の大半は省略の巧拙にあるとも云へるのであります。しかしながら無闇矢鱈に省略をほどこして、句が生きる譯のものではありませぬ。若し自分にか判らない省略をすれば、それは獨りよがりの句として捨てて顧みられないのであります。

す。

ではどんな語句を省略するかと申しますと、その句の表現上、焦點から遠いもの、即ち必要の程度の比較的尠ないものから省略するのであります。それは助動詞である場合もあれば助詞であることもあります。時には動詞すら省いて、簡潔な句に仕立てあける場合もあるのであります。しかしながら語句そのものが、無駄なのではなく、時と場合によつて或は無駄となり、有用となるのであることも知つて置かねばならないのであります。

次に省略法の句を例示することにしたします。

煙草一服東西南北夢畑

(宵明)

經二分話一分盆の寺

(自由朗)

夕立は小氣味よし君が叱咤も

(霞乃)

中學へ行く子行かぬ子辻で會ひ
(滿潮)

頸筋を見惚れ八階まで昇り
(黙平)

一切は無でありながらさりながら
(素人)

今朝みれば昨日時化たは嘘のやう
(柳哉)

御在宅ですかに襟へ針をさし
(三笑)

弱氣のなんてしたらを附加
(光路)

奈良めぐり鼻の穴だけ見て戻り
(北城)

大毎も止まり豆腐屋も止まり
(豆秋)

九文三分を亭主ことづかり
(五葉)

それからは出て行く先の用を聞く
(草明)

元氣よく帳簿を閉ちて書に行き
(照葉)

青空へブランコの足打付け
(鎌月)

六度五分七度二三分癪う病み
(露斗)

幾らでもありますが、これ位にして置きます。

「煙草一服」の句は、煙草(を)一服(喫うて)東西南北(を見渡すと果てしなく)夢畑(である)と敘述しなればならないのであります。それでは餘りに冗漫になるので、出来るかぎり省略をして、斯くは簡潔な力強い句となし

たのであります。この句は名詞ばかりで構成され、助詞も動詞もすべて省略されてゐる好適例であります。作者は北支や中支の戦線を馳驅した兵士であります。この句を讀むと、火野葦平の「麥と兵隊」を想はされるのであります。

「經二分」の句は僅に假名

が一字あるばかりで、これも又殆んど名詞の羅列された句

であります。盆の(頃の)寺(は忙しいので)役僧が檀家先

で(經(を)二分(ぐらゐ讀み)話(を)一分(ぐらゐし

て引きあける)とあるべきところを、右の句のやうに壓縮

して敘法を簡潔にしたのであります。この手法で、職業化

された盆の頃の寺をまのあたりに見るやうで面白い句であります。

「夕立は」の句は

夕立は小氣味よし君が叱咤も(夕立の如く小氣味よし)の括弧の中が省略されてゐるのであります。この句の妙味

は比喩が非常にかけはなれたものを擷んで一句をなしてゐるところにあります。

「中學へ」の句は

中學へ行く子(と中學へ)行かぬ子(と)辻で會ひと云ふのを、括弧の中だけ省

略して簡潔な句に仕立てたのであります。昨日までは同じ學校の庭を踏んでゐたのに、今日の一人はほこらしげに見へ、一人はいぢらしい姿となつて走るやうにして立ち去る光景が躍如として迫つて來るではありませぬか。この句には文字に表はしてゐないものまでも感じさせられます。それこそ一に省略の力の威大さを物語るものに外ならぬのであります。

「頸筋に見惚れ」の句は

(女の美しい)頸筋に見惚れ(て百貨店のエレヴェータ

いで)八階まで昇(つて)しました、途中で降りる筈なのに)と敘述すべき句であります

それを原句のやうに壓縮して力強い句となしたものであります。この省略によつて、この句がいかに生々とした句となつたかが知れるのであります。

「一切は無でありながら」の句は

一切は無であり(と悟り)ながら(も)さりながら(な

かなか悟り切れないものだ。そが凡人の淺間しさか)と

補促して見れば、この句がいかに省略されたかが判るであ

りませう。

「今朝見れば」の句は

今朝(海を)みれば昨日(あんなに)時化けた(の)は嘘のやう(に海が風いでる)と云ふ句であります。この句からもいかに多くの語句が省略されてゐるかを學ぶべきであります。

「御在宅ですか」と云ふ聲に

御在宅ですか(と云ふ聲に裁縫の手を止めて)襟へ針を差し(ながら玄關へ出て行つた)と云ふ家庭風景を詠んだのであります。この句も又多くの語句が省略されて居るではありませんか。

「弱い氣の」の句は

弱い氣の(男なので取消しが出来るやうに)なんでしたらと(云ふ言葉)附加へ(た)と云ふのであります。斯うした性格の持主をちよいちよい見かけますが、そこを捉えたのであります。

「奈良めぐり」の句は

奈良めぐり(をして大佛の鼻の穴だけ見て戻(つた)と云ふのであります。折角奈良見物に出掛けたが、雨に降られてやうやう大佛だけ見て戻つたと云ふ例はよくあります一寸した穿ちの句であります「大毎も止まり」の句は(風水害のために)大(阪)

毎(日新聞社)も(電力が)

止ま(つた)が)豆腐屋も(風水害のために電力が止ま(つた)と云ふのを壓縮して原句のやうな簡潔な句としたのであります。この句は昭和九年九月廿一日の關西風水害の時に詠まれた句で、大資本の新聞社と小資本の豆腐屋とを對立させ、天下の大新聞社を顔色なからしめた皮肉な句であります。この句の中にあります「大毎」は固有名詞の文字の省略で松竹映畫劇場を「松映」、關西急行電鐵株式會社を略して「關急」と稱するのと同じ用法であります。同じ作家の句に

橋筋は春の匂ひのこうこ巻

と云ふのがあります。橋筋ははつすじと訓み、我橋筋を省略した呼名であります。句は戦前のもので、橋筋の春の感じをよく出してゐる句であります。

「九文三分を」の句は

(足袋の)九文三分を(女房から)亭主(が)ことづか(つた)とすべき技法を、それで長く過ぎるので、このやうに省略したのであります。九文三分は女の穿く足袋の文數であります。それで女房からと云はなくても女房

であることが、うなづけるのであります。

「それからは」の句は

(嘘をついたことがばれたので)それからは出て行く先の用を聞く(やうになつた)と云ふ省略法の句でありますこの句で、嘘をつくのは亭主で、出て行く先きの用を聞くのは女房であります。それも省略されて居ります。「それからは」の用語は、單に語句の省略だけでなく、ある情景を言外に髣髴させる力を持つてゐることを知ることが出来ます。それからはに類した用法の句は古句にもあります。その手代その下女畫は物言はす

はす

と見渡したところ下戸はおれ一人

の「その」や「と」が、即ちそれでありませう。斯うした用法は、それ等の語に含まれた意味が前後の語句によつて類推するのに難くないことを條件とするものであります。

「元氣よく」の句は

(逢ひに行く嬉しさに)元氣よく帳簿を閉ちて晝(の色街)に行(つた)と云ふのであります。得意先へ廻はるやうな顔をして晝遊びをする店員を詠んだ句であります。

「青空へ」の句は

青空へ(やうに高く揚つた)と云ふのであります。「打付ける」で省略したために、勢ひ込んで、高くあがり切つたありさまを想像させられるのであります。

「六度五分」の句は

(體温が)六度五分(まで下つたかと思へば)七度二三分(まで上つて)輕う病(んである)と云ふのであります。暗に胸を病んでブラブラしてゐることを温度で表現したのであります。

以上は何れも現代の作家の句であります。次に古句の省略法の句の二三を擧げて參考に資することといたします。

死なぬかと雪の夕にさけてゆき

寝せつけて亭主とかはる松の内

呉れるかと思へば鼻汁をちんとかみ

「死なぬかと」の句は

(鯢にあつて)死なぬかと雪の(降つてゐる寒い)夕に(鯢を食へばあたまの)で飯を)さけて行(つた)と云ふ敘述を壓縮した句なのであります。鯢と云ふ文字は全然省略されて句の中に見當ら

ぬが、他の語句によつて、それが鯢であることが判るのであります。

「寝せつけて」の句は

(子を)寝せつけて(歌留多を取るために)亭主と(女房)かはる(のも)松の内(であるからだ)と云ふのであります。平素は子どもに束縛されて、なかなか歌留多遊びどころではないのでありますが、松の内ばかりは亭主がかはつて子どもを横に寝てやるといふ殊勝な心を出すのであります。それも起きてゐれば、なかなか亭主の手にはあはれないので、寝せつけて置いて亭主と入れ代るのであります。正月ばかりは亭主もおとなしく家庭の人となつたのであります。まだ女房に歌留多遊びの若さが残つてゐることも感じられます。

「呉れるか」との句は

(懐紙を出す様子に、祝儀を)呉れる(の)かと思へば(祝儀を呉れるのではなくてその紙で)鼻をちんと(音をさせて)か(んだ)と云ふのであります。これは吉原風景であります。鼻をかんだ方は標客で、祝儀を呉れるのかと思つた方は怨の皮の突つ張つてゐる遣手なのであります。

上述のやうな古句を、解釋しやうと思へばどうしても、當時の風俗人情習慣と云つたものを知つてゐないと句を味ふどころか、句意すら解釋し得ないのが常であります。殊に甚だしい省略法の句に至つては全く手のつけやうもない難句となつてしまふものであります。

引用法の句

に就て

川柳の構成上、漢詩、短歌俳句、謡曲、箴言、標語、俚諺、端唄、淨瑠璃、故事成語等等を引用して、句を効果的にする修辭を引用法と云ふのであります。

しかし、引用する語句は人口に膾炙したものでなければならぬのであります。引用によつて句意を強化したり、ユーモア味を一層深めたりしなければならぬ筈の引用語が普通化されてゐないと云ふのは何んのためか引用なのか全く意味をなさないのであります。

しかし引用語法の句はどちらかと云へば、理屈つぽくなつたり、説明によつて、はじめ成る程と云ふ程度の句になり勝ちなので、詩的價値

から云へば第二義的のものに墮し易いのであります。一方から云へば、成語の持つ力の方が強いために、引きずられてしまつて、作家の手柄にならない句が多いのであります。例へば古句に

同じ時刻に三人淋しがり

と云ふのがあります。一寸讀むと謎々の句のやうでありませんが、この句の句意が判つたとしましても、一向興味が湧かないのであります。

新古今集に、
心なき身にも哀は知られけり
立つ潭の秋の夕暮(西行)
見渡せば花も紅葉もなかりけり
浦の苫屋の秋の夕暮(定家)
村雨の露もまだひぬまきの葉に
霧たちのぼる秋の夕暮(寂蓮)

と云ふ秋の夕暮を詠つた三首ががあります。何れも淋みしさがよく出て居ります。それを「同じ時刻に三人淋しがり」と川柳にしたのであります。これで報吉川柳の範圍を一步も出てゐないのであります。この句に比べるとまだ、

秋來ぬとさやかに見ゆる五色竹の方が優れて居ります。
秋來ぬと目にはさやかに見えねども
風の音にぞ驚かぬる

と云ふ和歌を引用した句であることは説明するまでもないであります。右の句では眼にはさやかに

見えぬどころか、はつきりと秋を七夕の竹のそよぎに知つたと云つてゐるのであります。しかしこの句にしましても、引用した原の歌の「目にはさやかに見えぬども」の方のうまさに魅力を感じるのには私だけではありません。斯くして引用法の句は骨折損に終ることが多いのであります。江戸の風物を詠んだ

横丁はまだ踏みも見ず輕賣

と云ふ句があります。これなどはすぐに、

大江山生野の道の遠ければまだ
ふみも見ず天の橋立

と云ふ和歌の引用句であるとなつて居るのであります。斯うした擬巧はどつかに借着の句ひがして、ホントの川柳の味が薄められると思ふのであります。

句意は横丁に住んでゐるやうな貧乏人ではどうせ高價な初纏を買ひそうな筈もないので、まだ一度も横丁へ這入つて見たことがないと云ふのであります。初纏を食ふことを一種の誇としてゐた當時の江戸人も、横丁に住んでゐるには輕賣から見くびられた譯であります。又、
さびしさに宿をたち出でながむれば
いづくもおなじ秋の夕暮
と云ふ和歌を引用して出來た淋しさに宿を立出て來るカフエ

と云ふ句があります。この句の表現にはいささか無理があります。「宿を立出て」なら「行くカフエ」としなければならぬと思ふのであります。これでは自他混同の觀があります。尤も句意は淋しさに宿を立出て、つひうかうかとカフエへ來てしまつたと云ふのであります。その方が「行くカフエ」よりはいいと思ひます。

古句に、
神代より日月今に地におちず

と云ふのがあります。この句は謡曲「安宅」の「夫れ世は末世に及ぶといへども、日月はいまだ地に落ち給はず、たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬ事やあるべきか」からの文句取りであります。

句意は、末世の最後には日月が地に落ちると云はれてゐるが、我が日本では遠い神代の昔から數千年の今日まで立派な王法で守護せさせ給ふので、日月が地に落ちるといふ筈もなく、天壤無窮の神國であること讃へた句なのであります。これなどは文句取りの上棄句。

下女が鼻むふんべつなるおきどころ
これも古句であります。俳句の「白露や無分別なる置きどころ」から引用したのであります。句品が落ちます。

落籍してもまだとけかぬる薄氷 (松郎)

の句は端唄の「御所草」の文句取りであります。同じ作家の
月給日あふてうれいき酒きはん
は「梅にも春」の文句取りで
秋の夜はながいものは「グーム

取
は「秋の夜」の文句取りであります。斯うした句は少し器用な人なら幾らでも作れるのであります。

君などは惡貨の一人流行るべし (一徹)

この句は、人格は零だし、醫術は下手糞だが遊泳術はうまいといふ醫者に、惡貨は良貨を驅逐するといふグレシヤムの法則を引用して皮肉を飛ばした句であります。

次に成語を引用した句を列挙して参考に資することといたします。

白粉の下は光陰矢の如し (史城)

家貧にして兩親をかへりみず (駒人)

生めよ殖せよ寺に權操が干され (正方)

女房の言むべなる哉廿日過ぎ (古句)

春宵一刻價は三分なり (同)

出てうせう、汝元來蜜柑箱 (同)

誇張法の句

に就て

事物を描寫する場合、實際よりも、より以上に過大に表現する手法を誇張法と稱して居ります。例へば白髪三千丈の類であります。つまり針ほどのものを棒ほどに或はそれ以上に云うて、特別な注意を惹く方法なので時には非常に効果的であります。それを他の人達が文字通りに解するやうな場合には誇張法は許されないのであります。白髪三千丈と云へば、誰でも眞逆そのままにうけとらないで、非常に長いといふ印象だけをうけとる譯であります。これを假りに白髪三尺と云うたならば、ホントに三尺と解する人もあつて、實際と相違することになり、全く虚偽の表現となる譯であります。従つて誇張法は活用を誤ると危険であります。しかし巧く使ひこなすと、ウンと効果的で、それによつて滑稽感を伴はすことさへ出来るのであります。

川柳では白髪三千丈式誇張の句は寥々たるものであります。それは追眞力のある川柳を創らうとすれば勢ひ、粗大な表現で間に合ふ場合が、まことに稀にしかないからであります。古句に

千客萬來みな來ると困まるなり
と云ふ句があります。これは適例ではないかと思はれるのであります。この句は小料理屋などに「千客萬來」と云ふ額がかかつてゐるのを見て、皮肉つた句でありませうが、誇張法によつて、巧みに滑稽感を出した句と云へるでせう。古句にはまだ

永い日をぐつと兩手でさし上げる
と云ふのもあります。これなどは涙の出るほど退屈してゐるさまがよく出てゐると思ひます。

次に現代作家の誇張法の句を例示する事といたします。時々是我太陽を蹴飛ばさん
(革郎)

嬌笑をさつと氷らずアがあき
(町二)

鶴掛りやつと赤子の爪を切り
(一浪)

日記帳くれは去年は風邪ばかり
(没食子)

入れ變へる心を女中たんと持ち
(貴志子)

化粧するために袴のかと思ひ
(潮花)

直立不動で伸びる竹の子
(天花)

「時々は」の句は白髪三千丈式誇張の句であります。句意は説明するまでもありますまい。若さがよく出てゐる句であります。

「嬌笑を」の句は、嬌笑がみなぎつてゐた部屋のドアがあいたので、ピタリと睜けさに返へつたさまをさつと氷らずと云ふ誇張した語句で巧みに云ひあらはして居ります。ドアを開けて其處に突つ立つてゐる人が、部屋の中にある人たちにとつて、權威ある人であることは云ふまでもないでせう。

「鶴掛り」の句は、赤子の爪を切るのに、いかにも大袈裟に總掛りだの、やつとだのと云ふのは、たしかに誇張であります。しかし、その誇張によつて、愛情も出てゐるし新世帯であることも判るといふ効果をあらはして居ります。總掛りと云つたところで必ずしも人数の多数をあらはしてゐる譯ではないのであります。夫婦二人でも總掛りなのであります。そこに誇張がある譯です。

「日記帳くれは」の句は、去年は風邪ばかりの語句が誇張となつて居ります。實際はちよいちよい風邪をひいたことを日記を見て知つたのであります。

「入れ變へる心を」の句では、たとへ持ちが度々過ちを繰り返してゐることを云ひ表はすと共に誇張となつて居ります。「ともだちの」句では、雲のごとで状態を表はしてゐる譯であります。誇張して感じを出した用語となつて居ります。

「氣の觸れたやうに」の句では實際に、氣が觸れてはゐないのであります。觸れてゐるやうに感じられるほどに云ひ表はしたところが誇張があります。鞭は鹽干物の間屋が軒を並べてゐたところで、軒先で魚の数を數へてゐるさまは全く、氣が觸れてゐるやうな調子でありました。

「腹の兒へ」の句は、いかにも榮養をとらせるやうに、ソレ卵、ソレ牛乳と疊みかけたところに誇張があるのであります。しかし實際をうした夫もゐないことはないので同じ誇張と云つても、白髪三千丈でないことは云ふまでもありません。川柳ではこの程度の誇張が多いのであります。あまりに誇張すると句が野鄙になる懼れがあるからであります。

「煮かへされ」の句では印刷に使用された活字が煮かへされて再び活字に鑄造され、繰り返へして活字としての使命を果すのを七生御奉公と云ふ最大級の語句で云ひあらはしたのも誇張法の表現に外ならないのであります。

「飛ぶ飛ぶ飛ぶ」の句では、あばれ廻はる子供達を湯の粉の如しと誇張してよく感じを出して居ります。

「ともかくも」の句では、銀狐を眞逆かついで歩いてゐる譯ではないのであります。かついで歩いてゐるやうに誇張したところに、作家の皮肉な眼が感じられると同時に、句に滑稽味を出して居ります。

「化粧するのために」の句も又化粧品へ投する金錢を想像して、アレでは化粧するために、縁ぎに出てゐるのではないだらうかと誇張したのであります。この誇張によつて喰べるものも碌に喰べないでと云つたやうな裏も思はされるのであります。

「直立不動で」の句は、竹の子の突つ立つてゐるさまを、直立不動でといふ誇張した語句で巧みに寫生して居ります。以上の句に就いて考察いたしましたも、川柳では怒髪天を衝くと云つた風な誇張は許されることが判るのでせう。あまりに大げさな誇張をすれば、眞實味が薄れるからであります。

うたがりあ！んざ隊兵

つゞけて来た私等は久方振りによ受する慰問品はどんな季節は嬉しいか筆舌につくせなだけだが全身をかけたものである。慰問品を前にして一つ一つを鼻に持つてゆき慰問品から来る内地の香に思ひ切り浸つて居る兵士の顔はうるちり、なつかしい故郷の人々、なつかしい故郷の山河を思ひうかべてか慰問品を持つたまさか天井の一點をみつめて居る。もう一つ兵士を心から慰めて呉れるものは慰問袋の奥深く納められて居る慰問文がある。このありかを兵士は血まなこになつて探し求め便箋のやほらかい匂ひに若い兵士は鬱鬱をあげる。

「おいみせろ、みせろ」

「これを見られてたまるか」大事さうに内懐にしまつておいて暇ある毎にひつぱりだしては獨り讀みつゞけて居る。然しなからこの嬉しい慰問文にも奇想天外の異變がまきおこる。籤に依つて公平に分配される慰問袋を開いて慰問文を探し求めると、ものものしい活字で「何々聯合會」「何々援護會」とある封筒に、中身も「拜啓貴殿益々御勇健云々」なんておまけに活字で「其上候文のゴツゴツの形式的な慰問文がとびだしたりすると若い兵隊は一寸も足りない顔で年上の戦友の慰問文をながめて居る。兵隊は自筆の然も送って身邊のことども書いた慰問文を此上もなく敬ぶのである。慰問品も同様に皆様の讀んで面白いと思つた本に、庭に咲いて居る花を採つて押花でも入れて下つたものや、兎に角ありあはせのもの本當に嬉しいのである。「俺はいつ死んでもよい」と、今日の興奮を床の中にあつても語りあひ、且故郷のなつかしい

山河や、人々を夢みながら、寝やうともしないでロソクの灯をみつめて居た。

泰にゐて想ふ

大森風來子

陣中俳句會に柳人が何知らぬ顔で出席して、「天」と「地」に抜けた。その柳人、俳句は一年生程も知らない。しかしながら「地」の句は表現方法が悪いと云はれて、俳句らしく訂正された。曰く「蕭想の妙を得てゐると」。

季に約束された俳句は南方ではなか／＼厄介なものらしい。虫は年中鳴いてゐるし、螢は毎晩飛んでゐる。もつと厳密に云へば北半球と南半球では季が相反する。臺灣では臺灣の季が必

要だといふ人もある。印度やオーストラリアが加はればより一層季がむつかしくなるだらう。大東亞戦争によつて段々俳句が無力化したといふ。以上陣中俳句會で耳にしたものである。

彈丸が飛んで來る中で敵前上陸をする椰子の濱でも季節を選ぶこともない川柳が戦争に活躍してゐるのは當然であらう。

一億の關心が天空の決戦にあらはれる時、川柳も海や空にもつと進出しなければならぬ。零下何度といふ機上から下界を眺め敵艦を捕捉したり、敵機に體當りする壯烈なる飛行家の川柳も生れてほしい。そして南方の住民が日本語を覚えたら川柳も教へてやるだけの心構えが柳人にあつていゝと思ふ。「をばり」



片瀨醫學博士述
「安産のために」
册子呈上

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。



片瀨醫學博士 推奨
監査

ワダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

休閒地 潮花選

(佳)寮の灯へそれ／＼違ふ趣味をより
(佳)先輩の趣味へしびれがもたらせる

休閒地 犬が矢鱈にあはれ込み
茄子 トマト 不自由しませぬ休閒地
休閒地 野菜がヒマの影で伸び
物置のまゝで朽ちてる休閒地
馬鈴薯も甘藷も出來た休閒地
休閒地 ぐやみに肥料やりたがり
別荘の空地も茄子がいたわられ
一坪の空地も惜しむ隣組
休閒地 自給自足の芽が揃ひ
休閒地 小さな慾の工夫する
休閒地 あぶない足で水をやり
ねぎ みんな坊子のまゝの休閒地
サーカスが來て賑かな休閒地
休閒地 軍需工場の扉が伸び
一坪の空地へ待避壕も廻り
休閒地 素人で咲かす茄子の花
閑地 いま休む暇なき街の欵
日曜を閑地の土へ奉仕する
休閒地 隣保の汗が實を結び
微笑が芽生へを聞ひ休閒地
休閒地 ラジオ體操から白み
休閒地 秋をたのしむ肥の匂ひ
面白くなり休閒地 ほととげず
休閒地 やつと通れる道があり
菜葉蒔のまゝ 休閒地 耕され
模型機が飛ぶ 飛ぶ街の休閒地
(軸) 休閒地 ダリヤが夏の夢を追ふ
休閒地 奉仕のシヤベル並ぶなり
休閒地 嫁も姑も欵をとり

千一里 堅風三 澄月 浩三 祥月 市丸 花子 抱逸 平人 醉堂 研太 ひさみ 朝美 よしを 惠美須 天風 伊古 萬子 初惠 翠柳 昌男 菘笠 春涉 風柳 美世子 朝美 潮花 同 同

飛 燕



往 來

★森東魚氏より(北京)
拜啓其後は御無沙汰致居候筆硯
意々御多祥の事と拜察大慶に御
座候武川五編蛭子氏の骨折に
やつと完了の運びと相成本日
最終稿の屋翁へ送附仕候右一
寸御知らせ申上候御令室様はじ
め不朽御連中へもよろしく御
風聲被下度候

—十月廿八日附・路郎主幹宛—
★米田春童氏より(兵庫縣)
謹啓(前略)××の連山××の松
原も朝夕、紅になり紫になり、決
戦下一機でも多く前線への血の
叫びに應へ日夜増産に挺身する
吾等が豆戰士諸君の目を樂しま
せ一日の疲れを心良くほぐして
呉れます。夜勤に、徹夜に、職
場に戦ふ可憐なる十六、七の寮
生の姿を現場に見るにつけ、尊
きものを感じます。二三年前の
彼等なれば、未だ腕白盛、だが
来る日も、真剣に油にまみ
れ、目をグツト見張り大小様々
な旋盤にボール盤に製品を産み
出して行く幼き戰士、鐵の切粉
が紫の煙を上げ焼ける鐵の香が
鼻をつくデユラルミンが糸菊の
花薔の様に白銀に輝いて鋸り上
げられる。小さき腕に、ヤスリ
ハンマーが振るはれる。職場正
に戰場です。或る時は切粉の焼
けたのが顔に飛びグラインダー
の細粉が目に入り眼帯を掛けて
或は過つて足を負傷して寮に歸
る彼等を知る時、前線の將兵と
同じだと感動します。此の可憐
な戰士と起居を共にし生き抜く
私の生活誠に意義深く此の時代
に生れ此の様な人々のお世話

至らぬながら勤めさせて頂ける
事を想ふと御民吾生ける有難た
さを心より感じます。過日當社
の中に有る健民修練道場(法令
により定められた適齡前の青年
で、標準より低い者を軍隊式日
常で一定期間修練させる
寮)に於て待望の川柳初句會を
開催して頂きました。場長殿以
下××名、大廣間に集参下さ
れ、下手な私の川柳解説(誠
に鳥語がまししながら私の知れる
智識のありつたけ)を繰り擴げ
話しました。○戦時下や、もす
ると荒み勝になる「生産陣戰士
の氣持を川柳により」ときほぐし
何時何處にても(元無し)紙と
鉛筆のみにて作句、世層の表裏
をユーモラスにスケッチし生き
抜ける面白さ。○川柳の觀察眼
の着眼の仕方と、味ひ方○席題
兼題、雑吟、即吟と互選等々の
解説の後、作句に取り掛りまし
たが、皆な熱心に静かに時々は
爆笑もまじりなごやかな集り
でした。其の内益々精進努力させ
て頂き何時の日か先生をお迎へ
致し寮の参観やら、御講演も御
願ひ出來得る日を楽しみに致し
て居ります。(以下略) —十一
月三日附路郎主幹宛—

★池田可宵氏より(仁川)
天下の名仙へ足を入れて既に三
日、難コースをよちては頂上を
極める快。はるかに御健闘を祈
る「どてら着て山の靈氣をおほ
えつゝ」。「小説をぬけ出た女山
の宿」外金剛にて十一月三日
附路郎主幹宛—

★竹中脩二氏より(ピルマ)

お元氣で御活躍のこと、存上ま
す。兵隊さんになつてはる、
と來ました。日本によく似た習
慣の國です。赤飯や卵や牛乳の
ふんだんにあるところで大いに
英氣を養つてゐます。御奥様に
もよろしく御願します。「ぼだ
い樹のかげにたてがみ梳きもす
る」—路郎主幹宛—

★戸倉普天氏より(兵庫縣川西
町)
拜啓御丁寧なる御謝狀に接し難
有奉存候丹波の風物を御激賞下
され誠に光榮に奉存候一向御構
ひ不申五右衛門風呂に押し込め
たり臺所の長火鉢に放りつばな
しをしたり誠に申譯御座なく候
不惡御許被下度候御妻は元氣で
三十日歸宅致し候御安心下され
度候勿々十二月二日附、霞乃
女史宛—

★高峰柳兒氏より(漆北派遣)
謹啓八月二十五日付御貴信×月
末日に有難く拜受仕りました益
々御元氣にて御健筆の程を賀上
ます留守宅より貴誌七月號まで
送付あり再讀陣中の無聊を埋め
て居ります先般不覺にも任務遂
行中左眼に傷を受け入院の止む
なきに至り全く残念の極みであ
ります然し御蔭様にて他の方に
は何等の支障も無之次第にて何
れ再起の早からんことを祈念
仕り居ます—路郎主幹宛—

★西田紳樂氏より(大阪)
啓去る二十二日は藥草の講演で
出張しましたので出席し得ずその
旨戸倉様へ申置きましたが同氏
も御缺席でした様子失禮しまし
た。十二月の句會へは何ともし
て出たいものと思つてゐます。

町會の役目が多忙です。皆様に
よろしく十一月二十四日附路
郎主幹宛—

★小川靜觀堂大佐より(ジャワ)
路郎先生、あまり無理をなさ
いませぬ、延び切つたゴムみたい
になつては困ります。ヨーロッ
パで頭張つて居られるヒットラ
ー大總統の健康を祝し武運長久
を祈るとおなじやうに先生のお

症に體化
錠 50錠 100錠

アルベジル錠

年を取つても元氣を失はぬ様に
體操指導者の講習を夏以來受け
てゐましたが査定も通つたので
適任證がでる様です。先月下旬
は兵庫縣の委嘱で縣下の藥草採
集指導で各所へ巡廻採集やらこ
の處山野の草木と取組んでゐま
す。「草木徒然」が杜切ました
ね。筆硯を新たにして興味ある
ものを書きませう。相かはらず

身體を案じてゐる者は私だけで
は有りません。佛印からは御無
沙汰を致しましたがたまには句
稿を送りました。選没か海没か
とあきらめ(?)てゐました。

これからは勉強します。當地へ
参りまして二ヶ月半、少々忙し
いですが。慰安文藝を募集しまし
た機会に當部隊に眼を傷めて前
線から送られてゐる高峰柳見君
を発見しました。「選をして君
だつたのか僕ですよ」「バリ踊
たど踊つてただけぢやない」「
小さな願大きな願お伊勢さま」
—路郎主幹宛—

★掛飛吉宣氏より(ジャワ)

川維九月號及び九月二十二日附
御手紙本日拜見致しました。毎
月々々御苦勞様で御座います。
減員にも拘らず益々内容充實し
てたのもし限りです。(中略)
當地は此の頃雨期に入り植物は
急に生々として参りました。南
方特有の美味しい果物が出始め
ました。バナ、等は見向きもし
なくなりました。もう少したて
ば又マンゴスチンが出ます。マ
ンゴーやラボリンはどん／＼出
てゐます。果物の女王と云ふド
リアンはどうも臭くて喰べる氣
になりません。本隊を離れたつ
た〇名で中之島公會堂の五分の
一位の家に頭張つて朝から晩迄
晩から朝まで空とにらめつこで
す。村長郡長は勿論警察署長等
總ての人が頭を下げ通つて行
きます。一かどの部隊長です。

慰問袋から出て来た主婦之友を
見てあれやこれやと料理を作つ
てゐます。女の本でもこゝで夫
男に役に立ちます。—路郎主幹

宛—

★鳥生古佛氏より(満洲)

路郎先生永らく御無沙汰してゐ
ます。其後お變りも無く川柳報
國に御精進の事と存じます。昨
日曉童兄が面會に来て呉れまし
た。異郷の土地で意外な場所
で出會ひ、いろ／＼と話が山ほど
ありました。今までと變つた生
活、兵隊と川柳うんと勉強した
いと思つてゐます。今後共宜し
く御指導お願い致します。向寒の
折から何卒御自愛專一を祈る。
—路郎主幹宛—

★櫻川不水氏より(下關)

永らく御無沙汰致しました。い
つも濟まない氣がしてゐます。
十一月號に仰せの通り長男徹事
去る九月末京都高藝を出て目下
××の製紙會社(軍需)へ務め
てゐます。どうせ應召第二乙
になるでせうから暫く柳友(末二)
雄氏の宅へ御言葉に甘へてお世
話になつてゐます。こうした川
維柳友の親切は—に先生日頃の
御薫陶の賜と感銘してゐる次第
です。崑崙丸は私の船とホンの
一足違ひでやられたのです。實
験談やら御参考になる話やらい
づれ、折を見てお知らせ致しま
す。僚友達が見難漂流しながら
尙打倒米英を叫んでゐたと云ふ
事實を聞いて感慨胸を打つもの
がありました。こうした僚友の
氣持を少しでも外部の人に知ら
し度いと思つて拙い句を作つて
鐵道の大和紙上へ送つてゐます
御参考迄に「ツイ抱いて右拳は
敵の胸に擬す」「玄海も沸きら
む此の血この闘志」そして私の
現在の氣持「海に散らむ波を枕

の男なり」句はとも角氣持だけ
は判つて頂けると思ひます。最
後に十一月號先生の「飄へる袖
はなくとも美し」愚妻と共に
復唱三嘆した次第です。向寒の
初御奥様俱に御身御大切の程を
—路郎主幹宛—

★清水史路氏より(大阪)

(前略)少々快方に向ひ候折柄
郷里よりの打電に接し葬儀に参
列のため歸郷それがまたうや
歸阪早々の病臥只今はどうやら
恢復して休閑地に晩秋の陽を背
中に負ひ居り候敬具、十一月廿
五日—社宛—

★福田山雨樓氏より(東京)

啓、川柳雜誌奉還の御通知を頂
き思はず襟を正しました。過去
廿年間常に柳壇の第一線に立つ
て指導的な役割を果しつゝあつ
た歴史的「川柳雜誌」をこの大
東亞戦争の完遂完勝のために率
先奉還の一大勇猛心を決意致
しました先生の御胸中を悉察致
しました。しかしこれは先生の
大英斷であると共に時流を見抜
かれた一大卓見であると内心敬
眼に堪へないものであります。
川柳ももとより筆剣、銃後前線
に盡しけました盡しつゝある功績
は決して少くありませんが、こ
の超非常時にあつては決然奉還
の壯舉に出づる、實に先生なら
では出来ぬ斷の一決であります
不朽總會の議事録も昨日拜
見して當日の雰囲気もよくわか
り重ねて先生の御英斷に拜謝し
た次第であります。いづれ戦捷
の暁は舊に倍する晴姿を以て再
起を圖ることと致し、戦争中は

隱忍自重各自の戦域に専心御奉
公致しませう。雜誌は奉還して
も何等かの形で常に不朽會員の
の連絡を密にし、川柳の不滅の
精神を昂揚したきものと存じま
す。何れ具體案が出来ましたら
お知らせ下さい。 (以下略)
—十二月三日附路郎主幹宛—

★高田抱逸氏より(大牟田)

拜啓路郎先生始め奥様には日に
増し元氣にて御精勵の御事と遠
察致します。愈々寒くなりまし
たね、併し北の兵隊様を思ふと
きは寒い等口に出せざ先づ／＼
我慢して居ります。扱て本日不
朽總會議事録拜受即刻拜見致

しました。「川柳雜誌」××の
件全く自失する位落膽致してお
ります。實は新聞などより想像
しましてかゝる事を豫期しては
おりましたものゝ只愕然として
しばし……。路郎先生の御姿
が今あり／＼と眼前に浮んでお
られます。一分二分三分再度ペ
ンをとりました一々議事録を見
るにつけ(中略)然し今後何等
かの形式で川柳の發展、會員
支部本部の連繫、存続等につき
よろしく御指導御願ひします。
尚不朽總會の存ま續ことうれ
しくほつと致しております。そ
れでは後便と十二月號を待つて

大阪から神戸へ

神戸から大阪へ

待たずに乗れる

阪神電車

居ります。先生並びに御奥様御一同御氣味やう御祈り申上げます。十二月四日附路郎主幹宛。

★浪瑯之介氏より(大阪)

拜復一昨日一週間振りに歸阪仕候度々御懇情溢る御芳書拜受感泣仕候。御蔭様にて愚妻事其後経過極めてよろしく数日前より床上げ致し目下家事に勵み居り候へば乍他事御放念被下度候扱て不朽洞總會の議事録感涙にむせび乍ら熱讀發する言葉も兼見出候。一度帆船若同道參趣の心算に御座候。希くは先生川柳陣營の爲秋霜御いとひの程念上げ候。乍末筆御令嬢標御令室に御よろしく御鶴聲賜り度御依頼願上候。十二月五日附路郎主幹宛。

★伊古田伊太古氏より(川口市)

拜啓御無沙汰申上げて居ります。毎回松坂藝能講座の御添削を遠方迄お送り賜り厚く御禮申上げます。不朽洞總會議事概要「川柳雜誌」奉還(一同無言、暫時静寂)私も奉還の字を見た丈で睡をのみました。刊行を続け得られる實情にある事は紙の問題、部數の量で「川柳雜誌」が第一線に立つてゐる事を示されて居ります。だに奉還を決意されました事に先生の並々ならぬ御心情を窺ひ知る事が出来た。惜しい残念と云ふ第一に來た感は拭ひ去りました。存続に對する力の限りお沸きたぎつて來た熱情は身々が灼ける想ひでした。其等は總て先生が身を以て幾度か耐へ、嚙みしめて崇高な奉還の決意に到達せられた事を

落着いてから始めて知りました。お國の爲先生良くお決心下さいました。唯々頭が下るのみです。唯々先生に違ふのみです。今は全不朽洞會員、川柳人協會員、川柳雜誌の讀者が輝かしい眉を、川柳雜誌「奉還を聲の限り叫ぶ秋」不朽洞會存続に就て是非非遠方末席に名をお置き下されば幸いです。此の重大事に際して直に馳付けて御高話伺ひ度いのですが船造る一員として、それも儘ならぬ焦燥です。御着し下さいませ。寸暇を得た時は御拜萬々御指導を受け度く考へて居ります。十二月終刊號が

★北川春葉氏より(大阪)

界は待望して居ります。では御壯健でお忙しさのお處理の程を祈つて止みませぬ。昭和十八年十二月大昭奉戴日附路郎主幹宛

★國弘平休氏より(下關)

拜啓先般來再度川柳雜誌社の將來に關して御報知を下さいまして遠く下關市にありながらもその全貌をすることを得ました不朽洞に關する儀も確定次第御知らせを願ひます。尙市多樓兄は再度病のため床に就きました。お知らせまで十二月二十四日附路郎主幹宛。

★住田亂莊氏より(兵庫縣)

前略久しく御無沙汰申上げて居ります。御許し下さい。噂に聴けば此の度「川柳雜誌」もおやめになり専ら川柳講演に御盡しの由、山口草平先生より洩れ承り、まことにその悲壯なる御談心に打たれ、紋太さんとも相談の上われわれの會合へても御出

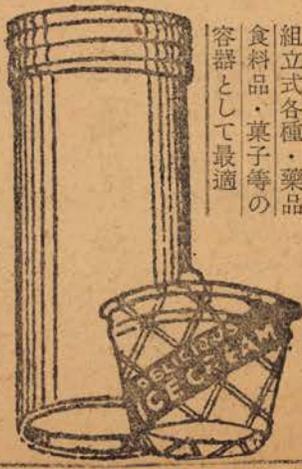
アマルギル錠

化膿症

中耳炎 扁桃腺炎 敗血症

金屬代用紙罐・紙コップ

ガラス代用器 紙容器



丸形・角形・小判形 組立式各種・薬品 食料品・菓子等の 容器として最適

特殊紙器工業株式

大阪市阿倍野區晴明通一丁目四〇番地 営業部用 天下茶屋 五八〇二番 工場専用 同 五八〇三番 二三九一番

席の上、一場の御教話を拜する事が出来るならば非常に結構と存じますが御意向は如何に御座いますか。小生も正月五日より節酒(斷酒に近い)を實行、大いに人間らしき生活をいとなくみたく決心致しそんな事より何より一度しみる、と二人でもお話し出来るならば魚崎へでも御來臨下さるやう、伏て御願ひ申上げます。奥さんはじめ皆さんによるしく、新年の御挨拶は改めて申しませぬ。不――正月六日朝附路郎主幹宛

食とんぼ

湖月

寺崎



紫・煙・談・語

今日で徹夜が四日続く。われながらシフンジン振りに驚く。この底力さへあれば、まだ若者に伍して行けそうだ。

★

若い者と老人との力の出どこはたしかに違ふ。老人はヒヨロとしてゐるやうでも底力がある。若い者には體當りと云ふ手がある。眞珠灣へ行つた若者はそのコツを知つてゐた。それに續いた若者もみなそのコツを知つてゐた。日本が強いのも無理はない。

★

北京にある東魚君は僕の顔を見るたびに「オイ摺切れちや駄目だぜ」と心配して呉れる。友情くらゐうれしいものはない。友よ。安心して呉れ。近ごろのシフンジン振りは又格別だよ。これで應召勇士のあとをうけて隣組の面倒まで見てゐるんだ。

★

老人の再教育と云ふことに就て考へてゐる近ごろ僕に快哉を叫ばしめたものは停年制の廢止である僕は死んだ親爺よりも一年有半生きのびた。イヤだと云つても老人組の初等科には違ひないがネ。「武玉川」の十六編に

拾ひ人もなけれど世きは捨がたし

と云ふ句があるが、幾つ何十になつても、生の執着は絶ち切れないであらう。殊に決戦下の今日、幾ら老人になつたところで、緋威しの鎧をかつき出す位な元氣がなくては駄目だ。

★

僕は老人部隊の活躍を期待してゐるものであるが、老人部隊の名は好ましいものではない。新語を作るのに妙を得てゐる新聞人に、もう少し味のある新稱呼を案出してもらひたい。

★

元氣一パイだつた布哇の浪老はどうしてゐるかな。風竹は麗花麗は北海はと、次ぎから次ぎへとハワイの連中のことを想ふ。そして北を思ひ南を思ふ。

★

古川柳に

元日の町はまはらに夜が明けける

元日の夜は氣の知れぬ人通

元日の人通りとはなりにける

と云ふ句がある。正岡子規は川柳と俳句の相違が判らないのかなか。イヤ神經が太い〜と申上げておこ。

★

川柳と俳句を比較したが、別に俳句を非難してゐる譯ではない。又非難しなければならぬ理由もない。ただ二者が全然違つたものであることだけを特に云ひたかつたのである。

維新の傑物、勝安房が蘭學を研究した時代にはオランダ語辭典の一部の入手が容易でなかつたと云はれてゐる。時價六十兩と聞かされては貧書生でなくとも手が出ない。まして、貧骨に到り、夏夜廻なく、多夜衾なし、唯日夜机に倚つて眠ると云ふ安房、日苦心の末、蘭醫赤城某が秘藏してゐる辭典を、一ケ年十兩の借料で借りうけ、これを寫したと云うではないか。しかも二部寫本して一部を他に賣却し諸費を辨じ、斯くして蘭學を勝ち得たことを思へば、一事に志すものにとつて、多忙も貧乏もヘツチャクもあつたものではない。ペンキョウ〜

★

宣長に、上つ代のかたちよく見よいそのかみ古事記はまそみの鏡

★

と云ふ歌がある。日本人は先づ第一に日本の國體をハツキリと知ることだ。

★

曾て普天氏に、女事務叱れば休む手まつか

★

と云ふ句があつたが、世の女性達にウツと働いて貰はねばならぬ今日此頃、この不名譽なそりを断然蹴飛ばして欲しい。

★

女性の袖を断ちモンペを穿つことを要求することはいゝが、マントを身に纏うて平然としてゐる男性を電車で見かける。

★

私の夢は飛行機に、船に、印度である。飛行機が、せめて二、三千圓で出来ぬものか。船を必要としないほどの埋立工事は出来ぬものか。電撃的に印度の獨立が片づかぬものか。

★

無駄と贅澤について特に一考を要する。無駄は無駄と知らずに繰返してゐる場合が多い。贅澤はゼイタクと意識してゐながら改めにくい場合が多い。同じ物、同じ事が、無駄であつたり、無かつたり、贅澤であつたり、無かつたりするのでウツカリしてゐられない

★

いつ敵機が襲來するかと訊く人がある。これ以上の愚問はあるまい。演習と實戦を間違へては困る

★

いろ／＼の會合の形式が案外舊態依然としてゐるのに驚く。カタの如く挨拶があり、カタの如く祝辭がある。主催者側の肝心の人が代理であつたり、來賓の祝辭も代讀で、しかも多くは代作である。そうした事に相當の時間をさく。これでもいいのかと云ふ感が深い。

★

舊習を打破すると云ふことは至難には違ひないが、工夫は舊習の打破にある。兩手に物を持つたまま、まだ欲しがつてるやうでは

凡人のそしりはまぬがれない。先づ兩の手のものを棄てなければならぬ。

★

近代戦は銃後のへこたれた方が負けである。手がぎれやうが足がぎれやうが決してへこたれてはならぬ。

★

皇軍の勞を稿ふことを意としなものはないが、戦線へ出した手紙より、戦線から來た手紙の方が比較的によくはないか。深思すべきである。慰問文を出す数は男と女ではどちらが多いか。忙しいと云ふことは、いつの場合でも口實に過ぎない。私の場合では秋の方がすくなくとも受太刀である。汗顔の至りだ。もつと〜手紙を書こう。(路郎)

お買物は三越
定休日・毎月曜日
營業時間 9時〜5時
大坂三越



決戦下の師走川柳大會

大東亞戰爭二周年記念

十二月十日 於御津八幡宮

★大東亞開戦三年目を迎へて、戦局は正に歴史的決戦の段階に突入の感あり。★本社ではこの二周年を期し、層一層の戦意の昂揚を圖るため、十日午後五時半より戦神御津八幡で決戦下の川柳大會を開催した。★会場は折からの霜夜の月を仰いで参加した柳人によつて膝を重ねる程の盛況で火の氣はなくとも何れも寒さを覚えぬ如く、席題の句作に餘念がない。

★司會者土産光洋氏に依つて開會に先き立ち國民儀禮が行はれ續いて開會が宣せられ先づ不朽會委員長戸倉普天氏立つての挨拶は皇軍の連戦連勝に依つてこの決戦下に於ても作句が出来る有難さを感じ、川柳報國へ一路邁進されたいと述べられて後、時局的馭談を辯じて降壇、★續いて「大東亞の言葉」の演題の下に戸田孤蓬氏は日本は將來大東亞共榮國を指導する立場にある。日本語を通じて日本精神を彼等に知らしめよ。人情の機微にふれる川柳を以つて日本精神を世界に擴める道具として益々精進あれと結ぶ。★路郎主幹は「句に風格を示せ」の演題の下に一般文化の低落は戦時下の情勢としてやむを得ないところであるが、せめて有志の人々に依つて少しでも文化の低落を防ぐ意味に於て、部分的にでも質の向上をはかり、他日に備へられたいと述べ、そのためには他誌に見るが如き

標語的な昨今の句を排し凡作をしりぞけ個性を活かし、風格ある句を目標に精進されよと述べて講演を終る。★支部對抗句戦と参加者對抗句戦には行司、豆秋氏、鮎美氏も軍配を何れに上げるかに決しかねた好取組もあつたが、遂に支部は花園に、参加者では葛藤氏に凱歌があつた。★最後に席題、兼題の披露があり、賞品が授與され、天位には漫畫家種瓜平氏の席上揮毫の色紙を贈つて、この盛會の幕を閉じた。

兼題「戦果」 橋本 綠雨選

やれ地圖だやれ眼鏡だ大戦果 晴夫
世界中アツと云はせた大戦果 示子
叱られた子等も戦果へかしまり千舟
大戦果 民一億の血を沸せ 一道
新聞の活字が大きい大戦果 一勢
ダイヤルをばいばいと戦果聴く 庸司
戦果を聞きかへす程大戦果 秒近
轉業の職場で聞いた大戦果 詩朗
全機無事基地に沸いたる大戦果 史葉
戦果にも酔はず生産力を上げ 没食子
宮城にぬかづく朝の大戦果 美知夫
大戦果あゝ日本に生を享け 鏡々
米英が隠し切れない大戦果 榮實
大戦果 働がひを おぼえたり 眞星
戦果 聞く 正座の父は東向き 保
大戦果 父は眼鏡を拭いてゐる 松太樓
産聲は戦果に負けぬ男の子 水客

兼題「赤十字」 市場没食子選

赤十字 宜撫の役もつとめて居 山治
めくら 弾浴びて病院船歸る 虻蜂
赤十字 一家揃つた胸につけ 緑雨
癒え 近く涙で仰ぐ赤十字 博也
赤十字 仕合せな灯に寝つかれず 水客
女にも 征ける途あり 赤十字 美奈子
傷兵に 捧げる處女の血が匂ふ 翠光
氷割る ひよきに更ける 赤十字 銃人
赤十字 郷土部隊の人と知り 文雄
院長の 躰さすがに 赤十字 柳秀
義手通す 袖の十字の色がよい 庸司
輸血する 腕も捧げる赤十字 喜由
住民の 施療が 續く赤十字 慶一
赤十字 白衣で来た日 綴られる 千枝丸

次々に島の名が出る大戦果
大戦果 みんなの話手で押へ
華やかな戦果の蔭に手を合はし
感激の戦果に犠牲偲ばれる
大戦果 天祐 神助ありとかや
大戦果 たゞ合掌の 腫を閉じて
雷撃は 見事 戦果を 擧げた音
家中が 萬歳をする 大戦果
抑留を されて戦果を 夢に見る
度しがたき敵だ戦果へ頬かむり
大戦果 母 感激の 針をとめ
一億の 險へ 熱き 大戦果
(五)ハンマーに力がこもる大戦果
(五)大戦果徹夜した身を忘れず
(五)大戦果學徒もジツとして居れず
(五)大戦果古賀さんの顔浮ぶより
(五)一億の動悸はずまず大戦果
(人)大戦果あとの覚悟を誓ひ合ひ
(地)大戦果とにかく寄算してみたし
(天)轟沈の煙がのこる朝まだき
(軸)頸紙を締めて戦果を祝ふ也

慶一 好郎
一 紫香
虻蜂 美知夫
柳秀 梅里
白柳子 香林
柳太 泉泡
潮花 千舟
柳笑 竹莊
桂風 雄治
銃人 晴夫
愛雛 豆秋
春童 義笠
豆秋 義笠
長次 義笠
普天 義笠
美奈子 義笠
一丙 義笠
竹莊 義笠
孤蓬 義笠
義笠 義笠
緑雨 義笠
博也 義笠
水客 義笠
美奈子 義笠
翠光 義笠
銃人 義笠
文雄 義笠
柳秀 義笠
庸司 義笠
喜由 義笠
慶一 義笠
千枝丸 義笠

赤十字 恩賜の義手に軽くゆれ
病院船基地から送る旗をふり
一兵も 死なしてならじ 赤十字
赤十字の 塔へ手負ひの鳩還る
赤十字 冷たい 風に飄へり
木犀の 香りのなかの 赤十字
血も兵に 捧げ悔なき 赤十字
(五)赤十字擔架東に向けてやり
(五)盲爆の中にも敵と 赤十字
(五)佛前の遺品目にしむ赤十字

(天)戦官の 險にうつる 赤十字
(軸)赤十字 無視人道に悖る敵
兼題「軍属」 河野 夜王選
軍属の 故郷偲ばす 隠し 藝好郎
軍属で 南へいつて 来ましてね 立緒
軍属の ボタンを一つ 掛け忘れ 喜由
次男奴も 軍属でさと 渡守 静月
軍属も また御桶なり 玉碎す 臘八
軍属で 征氣マレー語カタログ語 統人
軍属で 来て 戦友の墓に立ち 翠光
軍属として 海ゆかば 山ゆかば 珍柳
軍属の 太刀は 抜かずに 歸つて来 不二
門鏝がいり 軍属が 會ふてくれ 晶平
軍属の 或夜は 月が 詩ともなり 光洋
玉碎の なかに 軍属名をつらね 庸司
軍属の 腰に 成田の 不動さん 照二
進撃に つよく 軍属いたわれ 美知夫
軍属の 太平洋で 死ぬ誇 白柳子
盲爆を 軍属歯がみして 見上げ 義笠
軍属の 慰問袋は 取り巻かれ 松太樓
軍属の 日の出を 拜む 氣が 嬉し 柳笑
(五)軍属の 黙々兵の 列に 伍し 柳太

(五)捕虜闘む兵へ軍屬立見する
(五)軍屬の還らぬ覺悟爪を剪り

桂風 カズエ

(人)軍屬の特技に年のない強さ
(地)軍屬の發つ日植木に水をやり

葉光 虹雨

(天)部隊名を探す軍屬汗をかき
(軸)軍屬の兵士と死ねるのが嬉し

夜王

兼題「日の丸」 正本 水客選

日の丸が揃うてなびく社宅街
へんぼんと日の丸高いとこが好ま

日の丸の下に名譽の家とあり
日の丸とたゞそれだけで解る國

日の丸の用意も立てる 便衣隊
供出の米へ日の丸立て、やる

日の丸を子供に持たす 宣撫班
日の丸の場面で終る 紙芝居

日の丸の波アメリカへ 續く道
日の丸を立て、嬉しひる 移民村

神風の中に日の丸ひるがへり
日の丸へ 署名幾度 まだ征かず

日の丸の朝を軍服着て出かけ
日の丸を立て、宣撫の町靜か

さし上げて子に日の丸を拜ま

日の丸で 飾り慰問の歌謡曲
日の丸も 武勳を語る 汚れよう

日の丸の赫々 本當に唯うれし
日の丸をこゝへ建てたい世界地圖

日の丸へ 親子署名の人となり
聖恩の下日の丸の一億民

交換船あり日の丸に泣けてくる
日の丸の署名はみんな教へた子

今度こそ我が子へ振れる日章旗
原住民 墨で四角に丸を書き

日の丸へ 徴用の欲し、奉書日
日の丸を中に十億手を握り

萬歳の聲 日の丸に突當り
日の丸が正面 掃除行届き

日の丸は俺が立てると父が起き
(五)日章旗海からまた空からも

(五)日の丸に八日の朝の陽が當る
(五)日の丸へ素直に捕虜の足動く

潮晶水品水同
花平坊坊坊

(五)日の丸を立て、祭日勤めに出
(人)旗出して今朝はどえい霜かな
(地)日の丸が懸しくなつた二世
(天)日の丸の下で死ぬ氣の二十一
(軸)日の丸のたすき男の風があら

カズエ 豆秋 眞星 珍柳 水客

兼題「氏神」 水谷鮎美選

氏神へ 誓ふ學徒のい言葉
擊滅をかへり氏神 拜ふなり

氏神の青葉に友と久し振る
氏神さんバケツリレーに勝ました

本懐は氏神様で 神酒を受け
氏神を語り合つてる 大休止

氏神の柿も夕日に映えてゐる
(五)氏神で武運を祈る子と出合ひ

(五)結ばれて 拓土夫妻の立つ鳥居
(五)氏神へ 活潑に來る 卷脚絆

(五)氏神にうれしく残る先祖の名
(五)夏祭 氏神様の あはれやう

(人)氏神の繪馬なつかしい歸還兵
(地)ヘソの緒も氏神様にみつらら

(天)氏神へ 額づく母の背が丸し
(軸)い、月夜をなと氏神と廻り

席題「飯盒」 須崎 豆秋選

飯盒は男まかせにするキャン
歸還する 飯盒くぼんで 懐しい

敵襲へ 飯盒の水噴きこぼれ
密林で 喰ふ飯盒へ 虫が落ち

飯盒へ 生木がいぶる 大休止
飯盒で 顔も洗つた支那の朝

飯盒の粥で 故郷を語り合ひ
飯盒の隅に 日本臭ひはし

飯盒の蓋で 別離の酒かはし
當直に飯盒うどんの湯氣をあげ

飯盒飯 日本人であるうまさ
先輩として 飯盒の使ひかた

飯盒 炊釜こゝは 一番良い景色
氣短かな方へ 飯盒の煙がくる

飯盒の蓋で 番茶を分けて飲み
もう飯が出来た飯盒の音となり

泉香水品水同
泡林客月泡

飯盒の炊ける間の愛國歌
飯盒にエナメルで名を書ておき
(五)飯盒に水の足りない匂にする
(五)飯盒へそこの枝を箸にする
(五)飯盒の波れ凹んだとこよえ
(五)飯盒の焚き所なし 月見草
(五)飯盒も嬉しく煮えた女學生
(人)飯盒の飯喰つてこそ男なり
(地)飯盒のうまさ母に分けたい
(天)飯盒にガダルカナルは草を入
(軸)飯盒へたにしが一つ 運入つた

静月 雄泉 茂路 豆秋 柳太 研太 一丙 梅里 美世子 玲之介 雄治 晴夫 松太樓 彩泡 静月 水客 香林 泉泡

兼題「握手」 清水白柳子選

言の苦もなく手を握るお医者さん
言葉より 握手が先の幼な顔

飛行機を降りた巨頭の手を握り
陽もうら、握手の續く 帝亞丸

征く人へ妻は握手をためらはず
握手してお辭儀をしてるい、娘

閣下との握手勇士の語り草
馳せつけた友と車窓で手を握り

何もかも許すつもりの手を握り
感激の握手 禮儀に合ふ握手

握手した 産業戦士の 手の太さ
握手した 温みをもじつと握りしめ

手を握り 五族協和の旗高し
(五)關門をつなく握手に男哭き
(五)握り合ふ手は温い 共榮園
(五)先輩の握手を受けて隣に下り
(五)手袋のまゝの握手の手につかり
(五)別れいまのぬくみ手に感じ
(人)今着いた翼と握手寫される
(地)握手した村の外れの 霜柱
(天)東條さんの握手通稱を要ら

席題「金槌」 黒川 紫香選

建設と云ふ 金槌が 音を立て
妻と出た 夜店 金槌買ふてくる

錆釘は出たが 金槌見つからず
金槌の音も 嬉しい 新世帯

柄の折れた金槌をまよぼつとみ
鍵裂を見せ 金槌 借りにくる

帆船 松緑 泉泡 美知夫 征路 美知夫 没食子 松太樓 彩泡 静月 水客 香林 泉泡

金槌を持つたまんまで猫を追ひ
金槌を隣で 借りる 新世帯

金槌の頭が とんだ 蜜柑箱
古釘をのばす 金槌子が圍み

探して 金槌の下から出
金槌を持つて 男手頼み來

(五)金槌はないか、と父達者
(五)金槌の力あまつたらしい跡
(五)金槌を借りるついでに打たされる
(五)金槌で叩くは 智慧の出仕舞
(人)金槌の重さを知つた徴用工
(地)金槌 釘も 家主が借してくれ
(天)お隣りも 金槌の音 日曜日

美奈子 香林 帆船 雄治 喜由 水客 美知夫 一丙

支部對抗句戦

第一回戦 (〇)印勝

〇花園(安夢) 〇阪大(一丙) 〇松坂(孤蓬) 〇西宮(泉泡) 〇城南(白柳子) 〇大鐵(柳太) 〇豊中(紫香) 〇櫻島(眞星) 〇穂光(晴夫) 〇尼崎(寄與史) 〇布施(翠光) 〇梅田(三司)

第二回戦

〇花園(安夢) 〇松坂(孤蓬) 〇神津(不布) 〇城南(白柳子) 〇豊中(紫香) 〇二施(翠光) 〇堺(詩朗)

準優勝戦

〇花園(安夢) 〇神津(不) 〇布施(翠光) 〇豊中(紫香)

優勝戦

〇花園(安夢) 〇布施(翠光)

参加者對抗句戦

第一回戦

〇峰山(菊人) 〇邦太郎(喜由) 〇葛藤(水坊) 〇風月(好郎) 〇千枝丸(彩泡) 〇三葉(松太樓) 〇帆船(文雄) 〇博也(幽王)

第二回戦

〇邦太郎(峰山) 〇葛藤(風月) 〇三葉(千枝丸) 〇帆船(博也)

準優勝戦

〇葛藤(邦太郎) 〇帆船(三葉)

優勝戦

〇葛藤(帆船)

終りに各地から出句の御聲援、支部及不朽洞會員諸氏から大會費として多大の御後援のあつたことを深謝する(大會委員)



廻轉椅子

路・郎・生

★「川柳雜誌」のために、私自身
が終刊號と云ふ文字を書かうなど
とは夢にも考へてゐなかつた。
「川柳雜誌」に終刊號と云ふもの
があるとすれば、おそらくそれは
私の死後だと思つてゐたからであ
る。

★しかし、その時期が豫想以上に
早く到來した。しかも私自身の手
で終刊號を世に送ることとなつた
眞に感慨無量である。

★私のガンバリズムをよく知つて
ゐられる社關係の人々並びに愛讀
者諸賢が、本號を手にされたなら
ば、事の意外なのに驚かれるに違
ひない。たしかに、私は頭張るこ
とにかけては人後に落ちない方だ
ある。殊に幾度か死に直面し、妻
子の衣衾を削つてまでも「川柳雜
誌」の刊行を續けて来たことを思
へば、創刊以來二十二年後の今日
しかも社運隆昌、最高峰の柳誌と
して、何等後顧の憂のない時に於
て、さうムザ／＼と廢刊すべきで
ない位なことは百も承知、二百も
承知ではあるが、あらゆる事情を
すべてを捨てるにしのびず、本號

超越して廢刊の擧に出なければなら
ない場合が只一回ある。それは
國家興廢の時、すべてを國家に殉
じて皇恩にむくゆる時の謂である
★本誌は今、その只一回の廢刊の
時期に遭遇したのである。諸賢又
欣然として諒恕されることを疑は
ない。

★本號は例月の倍大號とした。し
かも殆んど私一人で筆陣を張つた
それは横暴心からではない。後か
たづけの意味からである。これ又
寛恕を請ふ次第である。

★昭和七年六月以降、十二年間本
誌に連載して来た「武玉川研究」
も本號掲載の五編(一九)を以つ
て一ト先づ一般の讀者とはお別れ
することとなつた。永年御愛讀且
つは御聲援下さつたことを執筆者
に代つてあつくお禮を申上げる。
なほ五編研究は既に完了して居り
執筆者の梅本蘆山、森東魚、蛭子
省二の三先生も幸に健在なので、
今後の發表に就て御懇談の上善處
したいと思つてゐるので、續稿御
希望の方は小生の手許まで申込ん
で置いていただきたい。

★「川柳塔」欄掲載句は十二月號
分へ新春號分を追加して嚴選發表
することとした。

★「近作柳樽」欄の投句もこれ又
十二月號分に、新春號への投句を
追加嚴選して發表することとした
二月號分の投句は遺憾ながら發表
の方法がないので、手許に保管す
ることとした。返還を希望される
方はその旨を記し御一報を煩はし
たい。但し返送費を同封のこと

★前述の通り、新春號への投句の
すべてを捨てるにしのびず、本號

川協のページ

柳・界 展・望

係・統 人

▼本社主催「白衣勇士慰問」句會は
十一月六日午後六時半御津八幡宮
にて開催川・雜布施支部句會は
二十日六時半城東商業學校にて開
催松坂藝能講習所麻生路郎川柳
講座は七日、廿三日午後二時、有
恒俱樂部川柳講座は十二日、廿六
日午後四時開講、なほ廿日、廿一
日は有恒俱樂部主催の史蹟探勝録
歩行と共同主催で安土、彦根、多
賀方面へ臨時吟行を開催した▼不
朽洞總會は廿二日午後六時から御
津八幡宮で開催された▼大阪警察
病院川柳會は十八日午後五時▼大
阪逓信病院川柳會は十六日午後五
時▼川・雜花園支部は十一日午後
六時から安夢居に於て開催▼阪大
川柳會は廿五日午後五時開催▼安
東川柳會は六日に福壽莊で、なほ
引續き二十日に開催された▼本社
主催決戦下の師走川柳大會は十二
月十日午後六時半御津八幡宮にて
開催▼松坂藝能講習所川柳講座は
五日、十九日午後二時▼有恒俱樂
部川柳講座は八日午後四時、なほ
師走納會は廿二日午後三時から玉
造のさくら花壇で開催した▼大阪
逓信病院川柳會師走納會は十五日
午後五時から辰己家で開催▼川・
雜花園支部は十八日午後六時から
安夢居に於て開催▼阪大川柳會は
廿一日午後五時開催▼市電川柳會

は十一日午前九時、四ツ橋市電地
下室で開催、路郎主幹出席柳話▼
安東川柳會の師走句會は五日に開
催された。

消 息

▼秋月安方氏(和歌山)は十一月
より住友金屬工場へ勤務された由
▼路郎主幹は日本樂器産業報國會
の招聘により十一月九日出版、濱
松で講演の後同地で一泊、翌日は
山中湖畔の富士高原児童養護道場
へ、十二日は甲府へ、「川柳常會」
主幹後原春雨翁と敬談されて十三
日歸阪された▼安井ひろし氏(徐
州)は十一月十三、四日開催の
「決戦文化聯合協議會」出席の爲
北京へ赴かれ石原青龍刀氏と會談
された由▼津田麗月冠氏(京城)
は十一月十五日夜離阪、十九日夕
刻歸城された由▼小川雷氏は今
回滿洲國通信社に入社され大阪支
社長に就任された▼岩崎柳路氏
(不朽洞會員)は所用で北京へ出
張され、石原青龍刀氏と柳談を交
された由、なほ氏は青龍刀氏の肝
入で「北京蒙疆句集」を發行する
計畫中の由▼浪玲之介氏(不朽洞
會員)は社用にて十一月廿八日松
浦帆船氏(不朽洞會員)と同行、東
京より「首筋に宮城からの風しほ
し」の句を寄せられた▼路郎主幹
夫妻は「丹波の餅を語る」の筆者
戸倉普天氏の招きにより十一廿七
日丹波の普天氏邸を訪れ翌早朝
餅搗見學の後、新餅を賞美され同
夜歸阪された▼唐津胡美氏(不朽
洞會員)離阪▼梶本是牛氏(奈良
縣)は十月下旬より病臥されてゐ
る由一日も早く、全快をお祈りす
る▼村松夢裡氏(不朽洞會員) 福

岡の同氏は決算期に入つたのと同
不足のため師走川柳大會には不參
するとの通知に接した。

化驗體症
ルジバル
山之内製
中耳炎
扁桃腺炎
齒槽膿瘍
淋疾

▼金子半醉翁(富山縣水見川柳
社)は十一月三日七十二歳の高齡
をもつて逝去された。謹んで悼む
▼木下幽王氏(不朽洞會員)の令
姉光枝嬢は十一月廿七日永眠され
た哀悼
▼兒島琴美氏(堺)御母堂は十二
月五日逝去された、謹悼▼深澤政
弘氏(静岡)は十二月廿七日永眠
された謹んで悼む

轉 居

▼西垣錦風氏(不朽洞會員)は大
阪市東區住吉町五四番地へ▼田邊
由布氏(不朽洞會員)は西宮市今
津網引町八九番地へ▼麻生アト
君は吳市廣町大新開松尾二郎方

に併せ發表することとしたので選
のやり直しをして再編輯をした。
従つて、本號の發行は遅刊をまぬ
がれぬ状態となつた。殊に歳末印
刷所の多忙をも考慮すれば、おそ
らく本誌の刊行は越年を覚悟しな
ければなるまい。この點前以つて
お断り申上げておく。

★本號の「句評・作品二三」は豆
秋、狐蓬、葦乃と私の四人で責を
ふさいだ。斯うした研究は雑誌が
なくなつても續けたいと思つてゐ
る。

★本號の「陣中柳」は北羊氏の
作である。煙草喫みの私は煙草を
喫うてゐる兵隊に特に親しみを感
じる。

★加川泉泡氏執筆の「北支征破回
顧断片」が未完結のまま、終刊と
なつてしまつた。愛讀者に對して
も、筆者に對してもまことに遺憾
であるが萬やむを得ないこととし
てお宥しが願ひたい。

★大森風來子氏の「泰にゐて想
ふ」を本號に發表することが出来
たのを欣んでゐる。

★「飛燕往來」は戦線と銃後の柳
友諸氏からの書信である。私一人
が讀み捨てるのに惜しいものもあ
るので、少し發表させて貰ふこ
とにした。濠北戦線で左眼を傷つ
けた高峰柳兒氏が、ジャラへ送ら
れて、小川靜觀堂大佐の御厄介に
なつてゐるなど、世界がウンと縮
まつたやうな氣がする。私の編纂
した「陣中柳」を北へ征つてゐ
る川柳人が手にしたことを報じて
呉れるのも愉快である。

★私は暇をぬすんでは大和へ足を
運んでゐる。十二月一日に、奈良
縣の聖地顯揚講の佐野ト占氏の案
内で吉野方面へ出かけた。本號の
「川柳の近畿大和篇」はその時の
收穫である。吉野も度々足を運ん
でゐるが、吉野山へ出かけて吉野
時代の懷古することとは近頃の私の
唯一の樂しみである。

▼中村地球治氏は東京都瀧野川
區中里町三四七▼森立名氏は中
華民國江蘇省連雲港觀海路北石
炭販賣股份有限公司運受渡事務
所▼福永義夫氏は大阪府豊能郡
庄内町三屋二五▼小川恒明氏
(不朽洞會員) は天津市興産第一

川柳人協會員に告ぐ

▼「川柳雜誌」の廢刊は同時に弊
協會の機關誌を失ふこととなるの
で、不朽洞會席上で非公式に協つ
たところ寧ろこの際、發展の解消
をしてはと云ふことになつたが、
その時期は未だ決定してゐない。
會員諸氏多數の御意見を至急承
りたい。

川柳人協會
會長 藤生 路郎

區山口街一、三井物産株式會社内
▼山澤英雄氏は東京都大森區田
園調布二丁目一〇一〇▼村松夢
裡氏(不朽洞會
員)は福岡市護
國町六ノ組四五
▼八竹正柳氏
(不朽洞會員)
の留守宅は大阪
市都島區野田町
五六、川俣方へ

★社の回覽板

今後の
本社に
就て
★十一
月二十
二日午
後六時半から御
津八幡宮で開催
された不朽洞會
總會の席上で雜

誌奉還のことを協り賛同を仰ぐと
共に雑誌は廢刊しても川柳雜誌社
は存続させることを述べた。それ
は他日にそなへると云ふ意味では
なく、支部との關係もあり、今後
の川柳の活動に資するためにも必
要とするからであつた。住所は現
在のまゝである。尤も疎開其他の
理由で移轉するやうなことがあれ
ば適當な方法でお知らせするつも
りである。萬一の場合には大阪生
住吉區萬代西五丁目二五番地藤生
方へ問合せされたい。

不朽洞會に就て

★十一月の不朽洞會總會の席上で
不朽洞會存廢のことを協つたこと
ろ、満場一致で存廢を決議した
ので、不朽洞會は今後も嚴として
存置され、川柳の活躍をすること
となつた。その具體案については
路郎主幹に一任されたので、本誌
の發行がかたづき次第、主幹は會
員諸氏と共に諸案を練り具體的な
ものをつくる豫定になつてゐる。

誌代の清算に就て

★本誌前約誌代清算事務の御請求
は昭和十九年三月卅一日迄に申込
まれたい。剩餘誌代の返送は四月
一日から開始することとした。

今後の句會に就て

★従來、社の催しであつた毎月の
例會は今後不朽洞會の主權に移す
こととした。従つて社としては毎
月の句會は開かないこととした。
主權は不朽洞會になつても、主幹
も毎回出席されて指導の勞をとら
れることになつてゐるので従來と
何等變りはない。尤も會員諸君の
骨折で新味のある句會となること
を期待してゐる。會場も矢張り元
のところである。新春の句會は都
合で休むこととした。

蓄積せる疲勞物質を分解・
解毒して健康を増進せしむ

其の他……胃腸疾患、食慾不振
肺結核、肋膜炎、妊産・授乳期に

V・B₁含有量一錠中〇・五グラム

強力メタボリン錠

☆一〇〇錠 三〇〇錠

いのちある句を創れ



投稿清規
用紙は原稿用紙、文字を正確
開封月日及編所記入、締切は
毎月廿五日、長編先は本社宛

本 社 白 衣 勇 士 慰 問 句 會

於 御 津 入 幡 宮

十一月六日午後六時半から軍神御津入
幡宮の社務所に於て白衣勇士慰問句會を
開催。句作の外に、水谷鮎美氏の前月會
會席上吟の句評と、路郎主幹の白衣勇士
の詠まれた句に就ての講演があつた。

出席者(順不同)

(銃人)

- 路郎・醉堂・銃人・紫香・桂風・不二・
香林・默平・潮花・好郎・三葉・靜月・
夜王・はるじ・朝美・千斗・松緑・光洋
泉泡・邦太郎・安夢・水客・三司・惠美
須・よしを・風月・春童・鮎美・萬の・
梨里・奈那

兼題「再起」

路 郎 選

- 御再起を待つてゐますと女文字 好 郎
再起近し貰へくゝと軍醫殿 同
ムツソリニ再起の口は一文字 泉 泡
ソロモンへ再び白衣脱ぎ捨てん 香 林
勇士た、出直しますと云ふただけ 妄 夢
再起の日近しと左手のたより 銃 人
再起する友へ嬉しい肩をかし 三 司
再起再起歩くまからはじめかけ 紫 香
再起する覺悟故郷へ振り向かず 朝 美
髪そつた跡着々と再起の日 泉 泡
再起の日十六貫の嫁が来る 同
義手振つて秋の陽射を歩いてみ 水 客

- 再起する覺悟屋號に未練なく 醉 童
再起する勇士の杖として嫁ぎ 同
生産へ病後と見へぬ兵集立ち 風 月
ベルトくるく再起の人の眼にしまる 潮 花
再起奉公叶つて軍醫拜まれる 靜 月
ちぎれ雲再起とちかふ眼に高し 水 客
何かしら力がある再起の日 光 洋
再起した日から手紙をよこさない 紫 香
母の愛神に通じた再起の日 松 緑
原隊はいま何の邊り白衣脱ぐ 千 斗
父に妻に友に再起の便り書く 桂 風
傷痕章再起のミシン強く踏み 是 じ
手杖を腰に再起のほがらかさ 千 斗
義手に血が通ひ再起の日も近し 妄 夢

兼題「菊」

水 客 選

- 吠へられた支關菊が眞つ盛り 紫 香
大輪の菊がきれいな駐在所 同
懸崖を活けて内科のよきはやり 同
菊の花野菜島に續いてゐ 松 緑
殊勳甲菊咲く家に母が居り 鮎 美
君が代へ菊も少し丈揺れる 萬 的
監視所の菊幾鉢か鳥之内 三 司
菊活けて夫が歸る部屋にする 潮 花
常會の顔揃ふまで菊を褒め 好 郎
菊に坐して刀の打粉する静か 水 客
懸崖のむき替へ客を待つ若さ 紫 香
菊の虫採る手に響く大戦果 三 葉
日の丸に懸崖に「右宣誓ス」 不 二

兼題「玩具」

潮 花 選

- 宅までおもちやで釣つて歩かせる 默 平
どこの子の玩具が一つふえて居り 萬 的
子の留守にふつと淋しい玩具箱 水 客
就職をして玩具屋へ子等と立ち 香 林
温ぬくと玩具がひかる青壘 鮎 美
お隣が買った玩具を買はされる 靜 月
兒のほしい玩具は父の氣に入らず 春 童
吳服部へ玩具を買つてつれてゆき 好 郎

- 科學する心玩具をつぶして 春 童
玩具箱犬より小さい象がある 千 斗
小兒科の疊玩具の汽車走り 紫 香
碧空を飛ぶ模型機の真劍鮎 鮎 美
玩具部へきてから子供手を離し 水 客
子の産物玩具は一つ先に開け 三 司

兼題「持駒」

香 林 選

- 持駒をやたらにルーズベルト見せ 夜 王
持駒は金銀ばかりで歩が足りず 銃 人
モスコへ持駒みんな持つて行 春 童
持駒はなんだくくと王を逃げ 銃 人
持駒の手垢にすべる王手飛車 鮎 美
持駒を尋ね障子を閉めに立ち 水 客
持駒を握つたまゝで逃げ廻り 夜 王
持駒を聞いて一手の勝にする 桂 風
持駒を何過も聞き王は逃げ 同
白旗へあつさり持駒列をなし 不 二
學駕と云ふ持駒の腕も鳴り 同
結局はその持駒がものを言ひ 松 緑
持駒の豫猶は盤の縁たくく 千 斗

兼題「ジャンケン」

互 選

- ジャンケンを覚え南の子がなつき 春 童
じやんけんまじ童心に立ちあへり 香 林
ジャンケンを覚えたでで長女逝き 美 須 惠
テイダがらしく坊々のジャンケンボン 潮 花
ジャンケンの子の足元を木の葉まよ 潮 花
代表のするジャンケンに皆黙り 水 客
ジャンケンに負けて苦しい隠し藝 默 平

川 梅 田 支 部 句 會 (大 阪)

- 秋半はお嫁にゆくと友は辭め 鮎 美 報
秋の夜照空燈が馳け廻り 房 子
頂上でのむ水筒へ雲が湧き 秀 峰
水筒の水が最後の殊勳甲 鮎 美
宿直にラジオ圍んで戦果聞き 同
宿直の夜更けへ咳の四十過ぎ 城 一
茂

川 三 池 染 料 支 部 句 會 (大 牟 田)

十月二十六日 蝶 人 報

- 集金の初めは紙幣の束に酔ひ 草 兵
集金のこゝらが怖い山の道 同
十年もたてばなんとかなる家計 抱 逸
子を寝かしつけて算盤やり直し 紅 之 助
仲好が友の輪血で蘇り 藤 樓
仲好の悪口聞いてだまりこみ 子 盛
仲好が負けてはおらぬ殊勳甲 龜 水
コロギの標本をランドセル 平 人
手づかみを客に氣兼ねる子澤山 一 葉
新婚となつて疊の香にほれる 紅 之 助
道場の疊手荒な事に慣れ 抱 逸
父征つて仲好ふへたランドセル 抱 逸
早合點米機ぬかつた同志打 梅 春
底冷へ夜勤借るだけ借つて着け 世 志 一
底冷へ手足我が身と思はれず 世 志 一
辭表まで書いて榮轉こそばゆし 十 四 之

川 下 關 支 部 句 會 (下 關)

半 休 報

- 大戦果俺のお國の司令官 正 人
大戦果祖母にも新聞読んでやり 精 花
今はない人の話を例にひき 吾 郎
死んだ子を思ひ出させる夏祭 同
亡き父の遺言だった歎に生き 市 多 樓
子のお蔭始めて拜む九段坂 正 人
陽當りのいゝ所だけ菊が伸び 市 多 樓
陽當りに永の病床運ばれる 正 人
日當りへ頸髭をそる回復期 半 休
陽當りを選つて散歩を許される 秋 無 草
陽當りを追ふて張板移動させ 市 多 樓
あの荷物モンペの妻は軽く持ち 精 花

何買ふて来たか變人荷を背負ひ
呼び棄ての客に赤帽振り向かず
背に負ふた荷物の上に猿は逃げ
女の目吞んでゐる事すぐ見付け
一時預り輕いからだになつて出る
襟垢に氣がついてゐる 女の眼
節穴の中は朝顔眞つさかり
獵奇ある空家節穴から覗き
節穴の數多すぎる 安普請
節穴で 先づ偵察をして誘ひ
女も工場へ馴れた聲になり
出鱈目がきかない妻の年になり
子の戦果夢に見ましたなどと母
敬市

川出雲支部句會 (出雲)

十一月十三日於中村居 柳蛙 報
初孫へ母もまわつた 菖蒲酒 一 聲
友の眼は静かであつた別れる日 さわだ
障子迄行けば這ふ子は返される 廉公
増産だ ハンマー 握る 此の快撃 笑朗
つくるひの針を休めた 大戦果 緑之助

花園支部句會 (大阪)

十月十六日 於安夢居 安夢 報
落葉おちば一茶の夢はまだ 小松園
自動車の中で 野心を企てる 豆秋
まだ野心捨てず男の 四十過ぎ 芳夢
野心作 秋の美術は 記者とある 芳香
給料をもらふたんびに世帯じみ 芦水
給料日 女の電話と さわがれる 木青
給料日 いやな男と つれになり いくた
定期券 色附く袖を見て通ひ 小松園
増産の油に しみた 定期券 東雀
結納の 國民服は かしこまり 豆秋
新婚は 結納の事から 語り出し 夫美子
十一月十一日
二人には 映畫の様な 戀でなし 安夢
人ごみの あなたへ 夫 苦笑する 洋人
卓上の カレンダー せよ 若い趣味 安夢

制服に下駄履きでくる重役さん 角堂
日めくりを四五日ためて出勤し 木阿彌
夕飯の子供に戦果 教へられ 一環
鏡湯へ歸還して来た肩の巾 邦太郎

川布施支部句會 (布施)

十月十日 於城東商業學校 聖司 報
事務室に家庭燐寸のさまよつて
前途なほ 遠遠といふ 顔が寄り
將來の 抱負を語る この若さ
セコンドの 音數へてる 手術室
腕時計ちよこく 覗く 新入生
時計見る 數程 仕事抄らず
十一月二十日
お隣へ 賞與のすんだ 簞箱來る
ボーナスを豫算に入れる 暮し
初賞與 封筒開く 手がふるへ
初めての 賞與を母に 拜まれる
先輩を訪へば 火鉢が 少さすぎ
賞與 出る 噂をよそに 事務机
猫だけが あたる 我家の 火鉢なり
通はまゝ 手持無沙汰 へ来る 火鉢
眞中に 火鉢が 欲しい 長意見
主人代理 火鉢に 遠く畏まり
金策に出る 外套の 襟寒し
遠吠えの 犬を 聞いている 股火鉢
香林

阪大川柳會 (大阪)

十月二十六日 利生 報
煙草屋で 方位聞いてる 國訛り 利生
人柄がにじみ出てる 趣味のよさ 小糸
手ささびの 趣味に 案外金が 要り 同
趣味のない 男 大きな あくびする 同
趣味でなく 志士の 通ふた 祇園町 柳秀
父と娘の ラジオの 時間違ふなり 利生
ためたのが たまる につれて 趣味となり 同
父の 趣味母 こそ ことば ことば 同
獨り者 炊事の 腕に 癖手が なし 小糸

座るだけ 掃除してゐる 獨り者 一彌
十一月二十五日
お歸りの 聲に 慌てる 奥座敷 柳秀
ばつたりと 出合ひ 少々 慌て 氣味 小糸
すんでから 笑ひ 合つて 慌て やう 利生
生 甲斐を 娘 挺身隊で 知り 同
朝見れば 昨夜と 違ふ 宿の 向き 柳秀
盛り場を 宿の 手摺りで 教へられ 同
肩車 行きたい 方へ だゞを こね 同
榮轉は 方角などを 云ふと れず 同
松坂藝能講習所川柳講座 (大阪)
十月三日 白面人報
内祝 配給ですと 子が ぐくばり 明
内祝 もう 孫のある 年になり 立緒
子供にも 一筆 かゝす 内祝 孤蓬
子澤山 内祝などに たじろがず 生々庵
内祝 その おみたてを 妻が ほめ 博也
尾頭も 焼けて 母 御膳につき 伊太古
内祝 無口の 妻も ちとしやべり 美奈子
生燭で 初めて 仕度の 待ち切れず 普天
冗談ですむに 氣短 腹を立て 立緒
氣短の子の 氣短 へ 補を 立て 同
氣短の 先づ 結論を 讀みたがり 生々庵
さて 出すと なると 氣短 しぶつて 居 聖司
氣短へ カウス 釘が見つからず 香林
御破算で 御破算で 氣短 合は はず 不二
ちつと 居る 二度目 電話させ 普天
一着に 来て 氣短の よく 動き 不二
氣短の 夫へ 女房 やつて ゐる 美奈子
十月十七日
領收 證見せて 割前 追加され 千里
子を持つて 何時しか 割前組 なる 立緒
割前と 別に チップは 誰か 出し 博也
金持の くせに 割前 承知せず 聖司
割前で 歸れば 妻の 茶が たぎり 香林
割前を ださそうと 恩師 酔ひ 給ふ 不二

惜しさうに 下戸は 割前 拂ふたり 好郎
割前を 忘れた 頃にとり 来る 普天
割前に入らぬ 人が 一人ふえ 孤蓬
割前へ お釣りは とれぬ 顔になり 生々庵
アパート 母は 家庭の 良さを 説き 好郎
家庭訓 まづ 父や 娘の 朝寝から 生々庵
居所 知らせとは あまりにも 暗き家 不二
あの 社長 あれで 家庭で 笑ふと さ 聖司
日曜日 父ちゃん じつと して おれず 龍夫
家庭の 人と 仲人 寫真 見せ 博也
十二月五日
配給制も 掛取りも 来てくれず 普天
待ち 呆け 師走の 風の 強い 事 邦太郎
背を 丸め 師走の 街を 通り 抜け 安夢
大吉も あたりも せずに 十二月 好郎
兎も 角も 十二月 だなど 腕を 組む 立緒
十二月 ビルの 社も 清められ 不二
十二月 道行く 人も 戦時色 一勢
忙が しさ 歳の 暮にも 子は 生れ 千里
福相が なんにも ならぬ 十二月 聖司
泣か された 子供を 叱る 男親 安夢
父の手と 知る 赤ん坊 泣き やまず 翠光
おしつこへ一寸 慌てた 男親 同

有恒川柳會 (大阪)

十二月八日 鋭 報
黙つて、光つて 居たが この 勤 青美
「どれ何處に」 交換船 伸び上り 同
公園で 機械 體操 見て 歸り 鋭
條件次第だと 金貨 素つ 氣なし 同
先づ 條件を 言ひ 椅子を 掛け直し 同
條件を 後で 出されて 氣が 變り 同
大阪警察病院川柳會 (大阪)
十月十九日 正柳 報
入選へ 無理に 笑はせ 寫される 道郎
かんくになれば 相手は 尙 笑ひ 文龍
笑ふのは もう 止せ 上役 來る 時間 雨聲
笑つたら 損する やうな 苦笑 久郎

燃ゆる敬神輝く本日

伊勢大神宮
樫原神宮
熱田神宮

参拜

急行終日頻発

關西急行鐵道



